KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

ホ 2
4706
10

門 ホ 2
4706
10

明治十四年五月

語彙

伊之部

文部省編輯局

ホ 門 4706 巻 10

語彙巻十

伊部五

いま

即今うて見在の時をいふ 万一 あさぶりお今立須良思ゆふぐりお今たちそ〳〵 又 ゆさ
花ひやまさくらなり思ひこそ〳〵かぎ〳〵お者こそいでなよ 六帖六 櫻
ちりのをだやまさくらつゑ〳〵 伊 いろ〳〵の
今おもよ もうな

いま

即今より轉よて此上の意あり 古今春上 うま
こうちゃうこそん 竹 とうけのぶ物らそんて買ひたり、今こそ孫五十両給そる
べ〳〵 六帖四 露うる菊の中ゑ ゆのことふひの野守出てこよ今いく日ありて
金葉雜上 ゆもちゝをゑ山田の庵お老おけりいやら〳〵秋お あらんとまこん 秋 三下
今一度こんとこもあがきぬるや 玉葉冬 あた氷る深山の雪のけぬらんよ今
いゝこゝとこゝろ
かきぬこん

いま

今よりの意あり 續紀廿六 故是以今由久前
二年 緩怠事無之 拾遺賀 萬代の初とけるを

いのり置て今行末い神ぞ為くまうん 六帖四 あるべきことを
月日おそくとまろ時い今行末ゆあり祈りそなたおもふ

いま

今ゆの意なて オツケ ちすとりのそんぞごとう
古今憲四 いまとんとりのひ〜たちうゆあぶ月の
有明の月を待出つる哉 宇圓讓 仲忠侍る所もいまいとひろ〜あるぬぐ〜
今御そうう〜もおそ〜ま〜まん
今ゆ今うと危ぶむ意又人を待うのどゆいふ
古今哀 道中うて俄ゆ病ぞ〜ていまく〜とな
ぞふけるとい 宇忠乞 よるひる思ひ侍らふ人の今々とまるまて云云ま〜てろの
遺言を思へば又 故君の今〜〜とあうり給ふまでゆのたまひ置〜ことゆ右
給いま〜〜ろば 六帖五 今々とことまろ妹い
まで山吹こまを風のまもまもまろん

いま〜

今ゆ〜あり 落窪四 うたて物う〜あり〜て、
いゆ〜〜とのひと更ゆ思ひもたく祈ぐ
いまう〜〜む意あり 狭二 月の光りゆるもあて〜
とあやふく〜いゆ〜〜き物ゆあるひたるもと
〇又いまもかるもとい 源桐壺 かく〜いゆ〜〜き身の七ひ奉らんものと人きう
るもと〇又いまきらふまて イヤナサヲ をとの 源葵 日ごろの御物語のとうゆ聞えまゆ
ちけもといま〜〜ろう あるえ侍もぶまを〜ことかたうゆまを〜ひて参りこむ
吉野拾遺四 いま〜〜〜き御さゆのあてけもち〜き山路をあのうせ給ふ

いま〜〜き

イ 俗
いまきらふより出て
腹たち〜きをのゆ
今方まて暫時過たる
前をのゆ

いまかた

俗 〇いんまのさた
今ゆの意なて
麹糖を水まて解き金の筯ゆ注きのを
餳を裏て炙たるもの

いまがいやき

俗
自今の意あり 源松風 今うろの御もてゆ〜のゆ
あるのうあう侍らんい心づく〜〜ゆ

いまから

いまき

〇やまき
東四三 御小袖十具御大口一唐
織物衣一領御明衣一領ゆ一
貴人の湯殿ゆ入り給ふ時御湯まゆ〜るる
もの〜衣服の上ゆおりひたる白き衣をのゆ

いまき

他所又外國より新ゆ都ゆ来りたる人をのゆ
雄略紀 今来工技 集人司式 今来隼人發吹
唐
聲三聲 蕃客入朝不在吹限

いまごろ

俗 〇いまのあんん
今の時ごろの意なて過たるゆいきのふの
イマゴロ 将来をのふゆい明日の イマゴロ あどのゆ

いまさらもち

俗
食物楕圓の餅もち紅白
黄緑等の色あり

いまさらふ　ハヒフヘ

得止天云云授流末都[隋陽式]平久於太比尓伊麻佐布倍志登申

いまさらふとのべたまへりいまさの下に注せし[續紀廿七]世間乃位冠波不樂伊末佐布倍伎猶不

いまさら

今更にて今あらためてといふ意又[今トナリテ]といふ意なり[万四]今更何をか思はんうちなびき心は君によりにしものを[古今夏]今更に山へかへるな郭公声のかぎりはわが宿になけ[又恋四]いつまでと思ふ物から今更になにぶんことをうらみしは頼まん[源紅葉賀]今更なる身の恥になんとぞおぼさるゝ[續古雑下]ゆるせかくときさはぬ翁となるまではまさに今更たとゆるなるらん

いまし

今といふ言にしの助字のそひたるなり[神功紀]龍言焉失志乃令醒之曰[土佐]いましまさといふ所にきぬ[又]いのるまゝしありて波風たゝぎいましかもめむれゐてあそぶ所あり

いまし

○なんぢ　人を指て呼ぶ語にて古へ上下の通称なり[神代紀上]汝身有何成耶[續紀廿]天皇大命

偁少汝多知召而[万十一]たらちねの母に障らばいたづらに伊麻思も吾も事やなるべき

いましがれ（俗）

いまがたに同じ

いましきのま

今の間の意なり[續紀廿五]今乃間か毀見定侔

いましくれ

今者にわかずし[万七]今敷者めやと思ひしみよし野のおほ川よどをけふみつるかも

いましは

今もまてしか貽辨なり[万四]あら玉の年の緒あけば今師波登ゆめよといひしわがせこがなのらし

まちな[古今恋五]今しはとわびにしものをさゝがにの衣にかゝり我をたのむる

いましむる

戒　誡　飭　勅

心ゆるしきこえざれとかたくいひつくる意なり[宇藤原君]かゝる人のいましむる五月へいぬ今はかの事あし給へ○又禁制する事もいへり[源帚木]さるまじきたまふらむ女なれ心あるは給へなやみてこの人のかたくななる名をもたてつべき物なりといましむ[又絵合]まぐらしたる上手どもをめしとりていましめて又なくこそのなる絵どもをたにあまき紙どもにかきあつめさせ給ふ[又若菜上]御らんじもてしつらひいましめかこのへさせ給ふぞ○又縛りて人を禁錮し又縛るをもいふ[宇拾十五]ひとやにすゑられぬふかくもちこめておかくいましめて

いましめ

いましむるの體言なり[源桐壺]宮の内にめさんことは宇多の御門の御いましめあればおけけと宣旨をくだされぬ

いらつ〜うあのひと、[又 碧] 物の告あらはさる事待うけらんと云云
此いのち〜めの日をとまりてを此よ〜と告申侍らんと云云

いまをせ サ行シ スセ

曾波遠邇伊麻世婆 [万 廿] 己麻勢波々乃自 [佛足石歌] 伊可奈留夜比止尓
伊麻世可伊波乃宇閇乎都知止布美奈志阿止乃祁留良乎 [多布加々毛阿留乎]
他へ行くなと、も他より来るなとも、いふ敬語
あり [記中] 志那陀由布、佐々那美遅袁須久

いまをせ サ行シ スセ

須久登、和賀伊麻勢婆夜 [万十二] ふるもうよのたどたるもあらはやまこえと
往座君乎者のつくるまたん [又十五] わたくしぶせよあらはきく伊麻須伎美我目
乎けふらあはせうとこのもひとあのたん

いまをせかる ラ行リ ル レ

坐と意いあるべきあるべしたゞ活用のうたる
のをうらべくいとで某々と申せ君ダあるあど

いまを意あり [大和六] 俗ふいまをせあるべきあるべしけるの時の子どもありけり [宇 巻七] 父大臣の
いまをせかまこのこかくあるべうり給へのまをせうとぞ何ろつくまん [源 梅枝] けしき
をこいまをせうとるえらばあらんべ〜やとされびめをと〜給ふ
[貫之集] こもりこふのまをせる神の〜給ふるむ

いまをせて〜

今少あり [宇 國讓上] いとあのつりもびわどをあ
くこの物せをせ今少し〜せて〜あるうあんと云

あど [又下] せをたまのもとふ木丁たて、あと紛さて出てある大将今をせて〜
近くよ〜せ給へ [源 花宴] ひとをとまけ〜きもうり舞たまくるふ云云、柳花苑と
いふ舞を、是い今をせて〜打をぶ〜せて [又 澪標] うへの今をせて〜物わぶ〜あるる
よをひふたなら〜せたまひあるも [枕 五] おとをとふめづら〜しき中おうら〜ら〜今
をせてあるべき

いまをせる セ行スル スレ

令坐おてあるべ〜おきをせるをいあり [万二]
天地のようあひのきもこあろ〜めをせ神の
みこと〜天雲のやくるきをけて神ら〜 [座奉] 〜たるひとる日のま子い
[万十三] 望の日ふ出ず〜月のたらく〜ふ君を坐而何をうあるもん

いまをせる セ行スル スレ

往また来るを敬〜をいふあり [伊] かる道い
[大和] 男とも宮つく〜給ひる いとをとるもとへ見〜人あり けり
遠き所よりいまをせる人あり [安法法師集] かんの君の此河原院ふ来んと、
契りとのまをせざりけるふ
いひやるたり

いまをせる セ行スル スレ

行〜むるといあり〜 [万十五] ひとらあ人君を
伊麻勢豆のつるぞうあ戀をくむ時のあ〜あ〜
御坐るあてあくるとりふ意あり [枕十] すとこそ、
をこありとてかく笑いまをせるぶ耻う〜あどの

給はせるやどに[宇拾十五]見奉るやうたゞいまいませぬ人にこそ[清輔集]此所にかしこにいませる神に扇を奉るとて書付ける[家長日記]當今の御なれちかひのいまそれば[撰集抄四]雲をあふぐ風を友とせる聖人もいませねば、いよいよむかしのと戀しくおぼえ給へりとなむ

いまそかる　ラ|リ|ル|レ|

いまそかるとゝ意なれど[伊]たかい子と申せいまそかりけり[又]右大将にいまそかりける、藤原常行と申せいまそかりけり[撰集抄上]むかし増賀聖人といふ人いまそかりける

いまだ

未なり其時になりてもまだに同じ

[継體紀]波姿絁箸矩謨伊麻嫋以幡麿底阿開

伱啓梨倭蟻暮[万三]白ぬひのつくしのわたは身につけて未は着ねどあたゝかに見ゆ[万十]由紀はふれども未ふかねなりあらませがよ春がませそたちらうめかちりつゝ[古今春上]梅がえにきゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ[宇國譲中]宰相もいつしうかなへ給ふおまへにはいまだ出(イデ)たまはぬ[枕十]今つらうせたまへまでは、木並(コダチ)などの見所あるはいまだなし

いまたゞいま

今只今にて俗に[スグ二]と云意なり[源空蟬]いまたゞ今立ならび給ひなん[落窪二]今たゞいまさらに奉らん

いまでがはどうふ(俗)

昆布と共に煮て胡桃(クルミ)を砕きてうけたる豆腐をいふ

いまどやき(俗)

東京今戸にて作る土器をいふ轉じては總て土器の釉を用ゐざるものに名づく

いまに

今に至りてといふ意なり[源槙柱]いかゞありける事ならんと今に心得がたく思ひける[又横笛]今に其ゆゑをしんえ思ひ給へより侍らねば[又浮舟]まゝもいまに戀しき侍るを

[著二]御影像を等身に圖繪して今に勝林院に安置せられたるなり

いまのうへ

今上皇帝を申せ[源少女]帥の宮ときこえし今は兵部卿にて今の上に御かしづけ参り給ふ、

いまのま

今の間にて暫時(シバラク)といふ意なり[續紀卅五]然今乃間此太子乎遂不賜在故が[後撰戀三]あそびざりし時いかなりし物とそれたゞ今のまも見ねば戀しき[源夕霧]いかなりしさらに今の間いふかしと聞えたりつるなり[又寄生]いまのまも戀しきそうらうなりける

いまのよ

當世といふ[竹]今のよにも昔の代にも、此皮はたやすくなきものなり

いまのをうと　○うはを

前の夫に對へて後の夫をいふ[和]後夫 和名宇波乎 一云伊万乃乎宇止

いまは

今は限りといふ意なり[貫之集]つかはしゝと見えいまはとて舟をこぎ出でゝ我は浪路をこえんや

ことたくらむ［六帖五］あけぬとて今もの心つくらふなぞのひしらぬ思ひをふらん［源 榊］大将の君さまもかゝるにいまそとかけきこえ給ひなんもちをもちうおもほされて［源 桐壺］故大納言のいまはとなるまでたゞ此人の宮つかへのほいかならずとげ奉れ［又 夕貝］今もものゝまぎるゝにつけしとや思ひそんと

いまもた

今も又なり［後撰 恋五］ことひねまにのみやぬれさおもはぬなゆゐかるとゝつらしてもおもひんとぞ思ふ

いまはよ

今者よくありよゐ歓辞なり［神武紀］伊弉波豫伊弉波豫阿々時夜塢

いまひめきみ

今姫君なりて前に生まれたるに對ていふなり［源 常夏］このいま姫君はようせずはおちの御ことゝもおほしどかし

いまへ ㊀俗

射術にいふ詞其弓箭を取て放つまでの功拙を［イマヘガヨイ］［イマヘガワルイ］なとゝいふ

いままゐり

新に参りたる仕人をいふ［源 浮舟］ようようさるへきうるんあたりを尋ねて今参りはとゞめ給へ［又 東屋］西の方に例ならぬ人のみえつるを今参りのあるかなとおもほしてさし覗き給ふ［又 蜻蛉］ほそなどをうちかひ今参りの心おもくもやあると問へば［枕二］今まゐりのさしこえて物知り顔にをしへやうなる事いひちよつかなる［又 十一］まだうひうひしきほどなるに今参りどもいとこう

まゝしげなるに

いまみや

前に生れ給へるに對へて今生れ給へる皇子を申せり［源 竹川］御門はましてかぎりなうめでらしと此今宮をば思ひ聞え給へり

いまみやのまつり

山城國紫野の今宮祭をいふ五月九日なり［公事根源］紫野今宮祭これは疫癘の神なり正暦五年長保二年天下おだやかならざりしとき此神社をはじめらる

いまめかし 形 シク シシキ

［當世メカシキ］といふなり［宇 拾上］たゞいまのめかしかりしとさいふのかぎりもおぼえたまはするかくしても［源 若紫］ふくよかにかいなでたまへり故尼君のゆゑ似たりける今めかしき手本ならはゞいとよう書き給ひてんと見給ふ［又 花宴］おくゆかりたるけはひたちならぬ今めかしき事を好みたるほどなりてな［徒然草上］昔よりも花やかなる今めかしくきらきらしからねど木立ものふりていとわざとならぬ庭の草も心あるさま

いまめく 動 カキクケ

［當世メク］といふなり

いまめかける　ルリルル

宇藏開下いとこのそまそのいまめかける御こゝまありける物を源葵かの源内侍の
まをけまりけりあるまゝ〜うふりがたくも今めく〜ふるまとゆくさふ

いまめく〜

あやうたを守らへたるこゝち詞花憲下たのめ
たりける男を今や〜と待けるふ

いまやう　やう音

今様うて今の世のふりといふ同じ　蜻中
あそこも今やうの女もさぶ引さげ經引さげ源東屋人の
めの〜と聞〜〜ゝた拾二是いもう〜の事也のやうのいやたげあり　狹三今やうの
をもま〜ゆくさぬ事あまゝと今やうの事うたいとゞあるあ〜う
人いとゝもあやうようあるゞう〜うこゝもあ是いのうあるゆる長明無名抄下今様
まをゞうこの歌の中ゆもよく〜よゝこの
いまやう　やう音

古以来越天樂の急ふあゝをせこの人くるあり七言
五言八句の歌をいふ又十二句あるもあり中
事也何只可在御心平家まゞ今様ひとろうたくふ禁秘抄上又後白河今様無比類御
兼りゝゝふ〜ふとて今様ひとろうたふべ〜どの給へば佛御前
千代るへぬ〜〜姫小松御前の池あるゝ龜とふ鶴こゝもあて遊ふるゝ色
うたひ物の今様の優劣を左右ふりけて
ゝふるゝぎあり百錬長安四年二月四日於大上
法皇御所法住寺殿有今様合事撰定堪能輩卅人
十五箇夜間毎夜壹番被決雌雄
いまやう　やう音

紅梅色の濃きをいふ源末摘花今やう色の
えゆるゝたゝ〜うつやうふるあゝる
直衣の又玉菅今やう色のいと
ゝゝたるとふ此御料
いまやううた　やう音

いまの世のふりの歌をいふいまやうふ同じ
ゝの今様うたゝともを紫式部日記今様うたゝどの狹四此ごろゝゝたゝの口のそゝかけるあ
所ゆつけゝゝ〜うゝけり
いまより

今かゝふ同じ　神代紀下從今以往後撰秋中大
ぐうけゝを源總角今よりのちゝ
うたふかゝ白露も今よりい心〜ゝゝゝる
今ゝり硯ゆもむひさぶ〜〜ふ
ゝゝたるゝゝゝゝゝゝゝゝゝ狹二大方
小松原今よりちよの
かげをまたるん　新古賀相ゝひのそ〜ゝの山の
いまりづち　裕。あづち

肥前伊萬里より出る白土あり
ゝゝのちの下ふ注ゝ

いみのりあれ 俗

肥前伊萬里より出る
陶器をいふ

いを

神事に忌嫌ふことをいふ 臨時祭式 凡觸穢惡事應忌者死限卅日産七日六畜死五日
産三日喪宍三日 禁秘抄中 六種忌
不吊喪云云穢惡佛事也

いを

忌みて物忌方違などの忌あり 源 帚木 さるべき方のいを待出給ひて 又 東屋 のこたぐふ
こゝとこゝかゝることゝあるもの
あくがれ給ふめる

いを

氣 ニカル 物 イマヒ あやしの意なり 源 若菜下 人々の
さるべきうのいをとたがへ心の
鬼みさう待りゝを
参りゝに事ありがほに近くきゝつゝもてゝ

いを

親属の死たるのちに服したるをいふ
服忌の忌あり 後拾 哀傷 左兵衛督經成
がりけるその忌に妹のあつまひせむとて師賢朝臣こもり侍りけるをとこ
ける 源 若紫 いをもすぐしたまへとて京の殿にあんと聞給へば 又 御法 大將の君も御いをに
こもり給ひてあゝしさるべきもの
ゆゑをも給へとぞ

意味 あることゝもの
いみあるもの

いを 音

忌嫌ひあふ
讐敵あり

いをかれ 俗

忌を清めたる藏をいふ 古拾 當此之時
帝之與神其際未遠同殿共床以此爲常故

いをくら

神物官物亦未分別宮中
立藏號曰忌藏

いをごと

忌事の義なり佛家の五戒十戒等をいふ
續紀 廿六 佛 能御弟子 等 天 菩薩 能戒受賜 天

いをことば

神事の時に禁忌の詞をかへ用ることをいふ
齋宮式 凡忌詞内七言佛稱中子經稱染紙
云云外七言死稱奈保留云云
稱香燃優婆塞稱角筈云云又別忌詞堂

いをぶらひや

伊勢にて潔齋の人の侍ひ居る屋をいふ
大神宮儀式帳 齋侍屋二間 長各四丈 弘各一丈 高八尺 五寸 六尺

いをぐき 汀九 汀九

甚しくたをやめくり 源 紅葉賀 かるるをとゝめくるとゝ道ありこゝるもむき
かたくおもひえ給ふ 源 桐壺 揚貴妃のうたちにのこゝ紀繪師とのへどる筆ぐきの
いひ又よろこゝあるもあゝきこゝあるもさらもて

ありけむ人のとほ方ひける いみじきものゝふあれたる心ありともおもくそれまうちぎみもおろかならぬべきことを思ふの事 又 いみじき給へるまじ 又帚木 いみじき契深くしけるたるよしえて

又ゆうし 枕十 此中将をいみじき人におぼし召して何事をもいふなる位をもとに給ちるえ紀と仰られけるが 源蓬生 我かくいみじきありさまを聞つけ給ちらむ必ずよぶらひ出給ひてんと 又玉葛 ことまていみじきのたみひにわたりしてる 又 いみじきこともありとちるまで見過してるたらん 徒然草上 世にはきあためあれたるそのいみじけも

いみじれ 俗

木名、へそうのきの下に注せ

いみだけ

神事に穢を忌むとして立る竹をいふ 呉竹 いみたけとは賀茂の祭の時竹を立て人を忌むなり

いみたち

伊勢の潔齋の舘をいふ 太神宮儀式帳 齋舘五院長二丈弘九尺高八尺

いみどの

忌清まはる殿をいふ 太神宮儀式帳 齋殿一間長二丈弘九尺高八尺

いみな

生ける時の名をいひ死たるをば諱といふ轉じて實名をいへり又轉じて攝關等の謚をいへり 大鏡二 文徳天皇と申ける御門は云云いみなをこそ田邑のみかどと申すめる 又 皇太后いみな斑子 又 太政大臣になりぬる人はうせ給ひてのちかならずいみなと申すの有けり 又二 御いみなは忠仁公とまうけたてまつる

いみのみや ○いつきのみや

神といつきまつる宮をいふ 神功紀 皇后傷天皇不從神教而早崩以爲知所崇之神欲求財國是以命群臣及百寮以解罪改過更造齋宮於小山田邑 藻十五 齋宮云云いそのかみふるのやしろのいつきのみや

いみやう 音

事物のかへ名なり或は人をもかくいふる名を附て稱へ又嘲るをもいふ○異名 海人藻芥 内裏仙洞なれば一切の食物に異名を付て被召事也 秘藏抄上 十二月の異名はこの實名をもちてまちたの異名をぞ作なり 長明無名抄下 九條殿云云人々に百首の歌よませ給事侍りきそのたびいみじき人々ひが事よとてそこに異名さへつけ給ひけり

いみりやう 俗

佛甲草をいふ豊後にては雄種といひ豊前にては雌種といふ

いむ マミムメ

物事をさけてせぬなりしてつゝしむ意なり 万十三 おもふしあまりにしるきをもとむる…

忌とはいみてにくみ憚る意なり ○又きらふ意なり 神代紀上 忌「庁之火」又夜忌擲櫛 竹 月の顔見るはいむ事と制しけれども 後拾秋上 ことさらに人もまさなむ 源紅葉賀 十にあまりぬる人はひゝなあそびはいみ侍る物を 士二下 心からいむべき月をなぐさめてあやまちゝいくよの空にうらみなら

いん

ものあそくびきいんつくりつ 又常夏 さくつくり身かくめて
ふどうのだらおよきいんつくりあたくいんもゆくし、
男女交接の精汁をいふ 今昔廿六 男女不娶と
いんども身の内ゆ嫌入うぬまで此おん子を

いん 音

生けるとやん語
傳へたるとや

いん 音 おーど

文字を木ゆ刻ーー又銅まて鑄て文書ゆ踏
ーー契とする物をいふ 公式令 内印五位以上
位記、及下諸國公文則印、外印六位以下位記、及太政官文案則印、
内西式 内印一面料、熟銅大一斤八両白鑞大三両、

いんえむ 音

因縁の音をいんゆんと唱ふたとえば稲の
粟ゆ因をいふ田畑の田ゆ縁をいふ因と縁と和
ーと稻の生きること果をいふ 宇治拾遺 この因縁ゆ
生々世々ゆ佛ゆ逢奉うり 慶節 因縁
光可の音其師道のゆるーを
受るをいふ 運歩 印可 信也 詳也

いんろ 音

大神宮の御贄を切る小刀を鍛ふる鍛冶
をいふ 太神宮儀式帳 忌鍛冶門人之作奉

いむかむ

御贄小刀
持切備

いむかまど

造宮の草木を切る鎌をいまだ忌といふ
太神宮儀式帳 即向山物忌以忌鎌草木始初

いむき

忌火をて飯炊く竈をいふ 太神宮儀式帳 大
物忌忌竈に炊奉

いんきん 音

海中の小蟹をいふ
字 蒲 小蟹 伊支

運歩 印金
古節 印金

滓を用ゐて糊を用ゐて紗帛をどゆ紋を
ーー其上ゆ金薄を貼ーたる者をいふ

いんぎん 音

物ごとゆねんごろなるをいふ
以字 慇懃 ギイン

いんぎふう 音

をーーの下ゆ注也
○陰莖

いんぎふう 俗

印形の字音をて人々の
實印をいふ

いんきよ 音

隱居をて山野ゆこもりをどーーて仕官せぬ
人をいふ又ゆ我子ゆ家をゆづりたる人をいふ

いんく 音 印矩の音なれど印を捺さゝ用ゐる具をいふ

いんくつ 音 隱屈の音なれど内々をいふ 四條流庖丁書 其外隱屈なる諸のひまをも可用

いんくつ 音 前の意より出て花やうなるぬをいふ

いむくさも 忌鍬の義宮殿を造るゝ用ゐる鍬をいふ 大嘗會式 造酒兒先熟齋鍬始掃地并堀院

四角柱 以字 齋 鍬神祇式云

いんぐわと 音 因果の音なれど條ゐいへり 慶節 因果

いんぐわるの 俗 薄命なれどせんかたなきものを云ふ因果もの〳〵義

いむけのそで 鎧の左の袖をいふ 太平 廿六 射向の袖をたゞそでとも〳〵

いんけん 音 脇差の一名なり 大内問答 脇ざし〳〵の事隱劍とも人ゐ見せざる様ゐ自然さ〳〵も

候ゞ殿中あるべきの努々御さ〳〵なれた事なれて候

いんげんさゝげ 東京 俗 菜豆ゐ 同ト

いんげんなす 俗 ○つけなす ○たうなす ○ながなす 菜名油菜ゐ似て大ゐ色淺く莖白色すゝて高二尺餘ゐ至る冬月醃藏して食ふ東京三河嶋の産其最なり ○菘

いんげんな 俗 草名そぶたんの下ゐ注せ

いんげんまめ 東京 俗 ○いんげんさゝげ ○かぶまめ ○ゆどうふろう ○ゆどうろう ○さんどさゝげ ○たうさゝげ ○ちくさゝげ ○えどふろう ○えどふろう ○ぎんぷろう ○ふろう ○まゝまめ ○かやさゝげ ○はろまろうまめ ○かやちうさゝげ ○ぎんさゝげ ○せんだいさゝげ 豆類なり苗葉小葉開ゐ花を開く其色白紅紫等あり莢細長すゝて四五寸其豆の色常種い白し又黑紅紫黃又白質ゐ紅斑あるあり未だ熟せざるとき莢と共ゐ莢と食ふ此草蔓生と特生とあり特生の者を つるまゝいんげん又一名ぶくいんげんと云ふ

いんげんまめ 俗 ○ふちまめ ○かやまめ ○たうまめ ○かきまめ ○せんごくまめ ○まゝくちまめ 蔓生の豆類なり葉葛葉ゐ似て小く毛なし 花ゐ紫白の二種ありて穗狀をなす後扁き莢を結ぶ白花い豆白く紫花い豆褐色なり未だ熟せざるとき莢を併せて煮食べべ ○鵲豆

いむこ

奉幣之後於社前給両社祢宜祝及忌子等禄

以字忌子御即位又童子嘗會供奉人名也

いんこ音

如く明了なる毛羽に赤緑紫黒等種々あり、鳥中の最美なるものにして、其品類至て多し、皆各部に出せり、東印度諸國の産なり、○鸚哥

鳥名おもにものいふこと

下に注せり

いんこ俗

いむひの下に注せり

いんこ

四時祭式忌火炊殿祭

いむこと

佛家の戒にて五戒十戒等を云用明紀出

よろこがくりとおん又頭そりいむこと

家之途以戒為本源氏いむことのあるべし

うけ給さくんをだに結縁ふせんなり

又相木いむ車

いんごふ音

因業の音頭固にして如何ともあらがたきを

いんこのごはんごをん音

いんこ因業に因てあるべしといふ意なり

いむひのごはんの下に注せり

呼ろくたる中古の例なるべし

江次七忌火

御飯六月十二月一日早旦供之内膳司

いむこやめ

忌火屋なるべし大嘗會の供奉の人名なり

中務内侍日記大嘗會のいとものなりなる

いむこめ女こかやいろいろのものさうそくのきぬ

いむさね

往一さねとりのかみ神代紀下是矢則

天皇曾欲以市邊押盤皇子傳國

昔我賜天稚彦之矢也雄略紀天皇恨穴穂

いむさつき

正五九月は三長月といひて齋たる月なり

いむさつきさつきとをかくこと

故に六帖五きくことをかくこと思へり時鳥

しやうせぬ

いんし音

實印をかしたる書物券證文の

類をいふ古節印紙

あとのもをいふ

いんしん音

運歩音信

いんきやく音

山野のとに家居して世間に

交りなき人をいふ○隠者

いんぎゃん 音 元のまゝに隨て爲ること〇因循

いんぎょ 音 かくやの下に注せ〇隱所

いんき 俗 黄金の自然塊をゐて氷柱の如くあるものをいふ〇黄牙

いんむき 忌鍬の義宮殿を造る時に地を堀る鉏をいふ 太神宮儀式帳 宮地草苅始次以忌鍬 宮地穿始

出雲風土記 童女之齊鉏〇按ずるに通本離ふ作る古本よい齊の省文斉と用ゐる

いんぜふ 音 引接の音あり人々あとだ佛を稱ぐふに佛の納受して来迎して引導せるとのゆゑ〇引接人をひきゐるとのふ〇引率

いんぞく 音 漁人をいふあゆの下に注せ

いんぞばう 俗 前にたちてみちびくをいふ引導の音あり人死せるとき冥土にあるもむく

いんだう 音 ものゝその行先を教へみちびくよしなり 慶節 引導

いんだうまきり 忌玉作の義忌清めるとりて生る故にいふ 祝詞式 大殿祭 齋玉作等 我 持齋 利 持淨 麻波 造作 能 瑞八尺瓊 能 御吹 破 五百 都 御 統 乃 玉 尓

いんだり 俗 相乘除して勝負ちがひをいふ

いんち 音 石を投ゐる戯をいふ 盛衰 卅四 飛礫の印地冠者原乞食法師加様の者共を被召たるとき

兼時消息 さるべきことそ又はちがひ 尺素往来 如例企印地招喧呼候者洛中可及騒騒之条太不可然也

いんちゑう 俗 ○あび ○あゆそむ ○そみやう 鳥名形鶴鷸の如く大さ鸕鷀ほどあり頭蒼褐背黑く胸腹白く足に蹼あり

いんむと 神事に用る砥石をいふ 出雲氣儀式帳 神嘗祭爲供奉太神宮司宛奉雜用物云云忌砥一面

いんとう 音 引頭の音あり大法會の時僧の役名あり 拾芥抄 下 大法會導師呪願唄師散花引頭人あるとき善事を爲ること

いんく 音 〇陰德

いんもつのまつり 十二月神祇官の齋院にて中臣其事を行ひ祭るなり 四時祭式 鎮御魂齋戸祭云云

右於官齋院
中臣行事

いんとん 俗
世間の交りときみて山野村落ゐ
家居もるをいふ○隠遁

いんぬ
神殿を造る時ゐ材を斫るヲを云 太神宮儀式帳
常限廿箇年一度新宮遷奉云云忌斧太一柄

いんゐ 音
印を押料ゐ用ゐる朱又ハ墨色
青色等あり 運歩 印肉 インニク

いんのう 音
ふぐりゐ同じ
○陰嚢

いんもら
太神宮の正殿の御柱をいふ 太神宮儀式帳
正殿心柱云云其柱名曰忌柱 祝詞式大殿祭
中間乎持出来多齋鉏乎
以齋挂乎立天

いんもろどの
天照大神の神衣を織る機殿をいふあり
殿則敷天班駒穿
殿甍而投納
神代紀上 又見天照大神方織神衣居斎服

いんもん 俗
紙ゐ摺らんが為ゐ文字圖畫をとゐりたる
板をいふ板ハ摺の材を用ゐるなり

いんむん 音
實印をいふ名字を彫て證と
もする印なり 古節印判

いんむび
火を忌清むるをいふ 名目抄 忌火御飯 江次七
忌火毎至神態鑽火炊爨謂之忌火

いんもん 俗
人の實印を彫刻もる
工人なり

いんびかまど
忌火とて清き火を以て飯炊く屋を
いふ 太神宮儀式帳 忌火炊屋一間 長二丈弘九尺

いんびと
十月の相嘗祭神七十一座の内住吉社四座
の祭ゐある名目なり 四時祭式上 住吉社四
座云云齋人潔
衣絶二疋

いんびのいひ
いんびゐはびのまつり
内膳司
行事
のものごとんの下ゐ注也 太神宮儀式帳 職
掌供奉禰宜之任日忌火飯食忌慎
六月ゐあり内膳司ゐて事を行ふ 四時祭式
忌火庭火祭中宮准之云云右大殿祭畢宮主於

いんびのかまどのまつり
十一月新嘗祭の時新ゐ炊殿を造りて此祭
あり 四時祭式 忌火炊殿祭云云右新嘗祭

時先新造炊殿依件
鎮祭宮主行事

いむびのかまどのまつり　忌火竈神祭料云云右神祇官直移所司請取、令宮主祭、

忌火を飯炊き竈に鎮坐まします神の祭なり　齋院式　忌火竈神祭料云云右神祇官直移所司請取、令宮主祭、

いむびのごもん　別に火を忌て調ぶる御飯をいふ六月十二月の一日に供ぶ　公事根源　供忌火御飯内膳司より奉るを大床子の御座まで供ぶるなり　云々是ハ月次神今食の御神事を今日よりもちゐるべし

いむびや　忌火を鑽る屋をいふ　大神宮儀式帳　齋火屋一間長二丈弘九尺高八尺

いんぷ（音）　淫乱ある婦人をいふ　淫婦の音なり

いむべ　神を祭る種々の物を造る又もちゐて齋きよまりて事をつかふ職をいふ姓に忌部と造殿齋部所居謂之麁香云云又令天富命率齋部諸氏作種々神寶鏡玉、弟、盾、木綿、麻等上

いんぼう（音）　陰に謀る密事をいふ　○隱謀

いんぶん（音）　私に淫をいふ轉じて淫乱ある女をいふ○淫奔

いんぽん（俗）　印抜まで摺たる文書をいふ

いんまのさた（俗）　今の前までいふ所なり　伊勢加茂等の齋に立給ふ親王の御祭服なり　齋宮式　右齋内親王神忌御服料

いむそそ　佛家の傳ある所釋迦の印なりといふ○印文

いんもん　隱文とも脱入たる模様まで帶に付る玉石瑪瑙犀角なども獅子唐花などの模様

いんもんのおび（音）　有文巡方帶　有文巡方帶　挑菜　帶有文節會行幸拜賀の時用之　後照念院裝束抄　有文巡方帶事　文隱

いんやう（音）　そもそも出てかげを陰ともひなりをを陽ともいふ○陰陽　易より出て萬物を此二つに配を譬ハ日、火、男、南等を陽とし月、水、女、北等を陰に配るを

いんやうせき 音
狀男女の陰に似たる
石をいふ

いんやく 音
印と鑰とをいふ出納の具あるゆゑに二つ連ねて
いへり 万代集雜 座主 鮮申ものを印鑑あらう

侍うける時とある
以字 印鑑 インヤク オシテカギ

いんよく 音
男女相愛する慾をいふ○淫欲 宇俊蔭 日の
本の衆生い生々世々に人の身を受べきもの
に あ〜〜せその故にいろふとりへば前の世に

いんらん 音
縱に淫するをいふ又好淫の
人をもいふ 慶節 婬亂 ラン

いんろう 音
腰に佩る藥器をいふ描金等にて三四五重
疊なれるもあり 初い印を入て佩たるより
然りの近古ようの腰間に佩て禮服の具とせるより 北山行幸記 御小袖
十重印籠ようのんにもちひてまゐるべきなり

いんろうづけ 俗
胡瓜越瓜の瓤を去り内に紫蘇等を
入れ塩藏せるものをいふ

いんろうもち 俗
豆腐皮の長く方形にして印籠の
形に作りたるものをいふ

いむをの
齋斧 齋鉏 始採山材 搆立正殿 祝詞式 大殿祭 齋部 齋斧 予以伐操 大嘗
會式 造酒兒先取齋斧始伐木 大神宮儀式帳 物忌先以忌鉏 忌斧 木本切始
忌斧の義神林を採る斧をいふ 古拾 仍令
大冨命 太玉命之孫 率手置帆負彦狹知二神孫以

いめ
しもつぎて伊米に見ゆあがあ
こひのまげをもぶらも

いめのあもせ。ゆあもせ
夢を語りて吉凶を考へさせるなり 仁德紀
吾身是何祥爲牝鹿荅曰汝之出行必爲人見射而死即以白塩塗其身如
霜素之應也云云及昧爽有獵人以射牡鹿而殺是以時人諺曰鳴牡鹿矣
牡鹿謂牝鹿曰吾今夜夢之白霜多降之覆
隨相夢
也

いめたて 枕詞
の通ひ路と見知るものを云稱
ど合せて枕詞とす 万八 射目立て跡見の岳べの○射目い射部
きもせるものとの意の 射ものをといひ跡見い鳥獸
つげなり 御獵人を立て鳥けものの跡どころを求て射

いあびとの（枕詞）

を云ふ〜〜とつづけたる射目人乃伏見が田井ゆ○射目人い射部人なて御猟の時ゆ鳥けものを射る人かげゆふ〜隠もなく移ろひ射るゆゑなり

男子より女をさ〜ていふ語なり女弟ゆ限らず記上意岐都登理加毛度々斯麻邇

いも

和賀韋泥斯伊毛波和須禮士余能許詐登基登邇仁賢紀古者不言兄弟長幼女以男稱兄男以女稱妹万二山越の風を時ゝみぬるよりも妻家在る妹乎うけてまぬびつ後拾雑二思ひきや秋の夜ゝのさ寒けきゆふいもゆゑ床ゆひとり寝んとは

いも　○うゐも○いへのいも○きしのもゆはるけのもゆはるも　菜名春月芋子を植○あろこぐき○つゐとうぐさ○あぐいも　一根より数葉を出す

其莖太くして液多し、高三四尺上ゆ一葉あり濶大すして形掣頭の如し、径七八寸より尺ゆ至る秋末ゆ至り根塊を堀出す大き拳頭ゆ過く、之ゆ側子附く多きものゝ殆と一外許あり食用とす○青芋字芋伊毛本和芋和名以倍都以毛内膳式供奉雑菜芋子四外廬主ごい〜けの大きなるいもの〜ものか〜らもと

いも

菜名やまろいもの下ゆ注す字蕷

いも（俗）

菜名ぞうきうのもの下ゆ注す

きつまいもの上畧なり

いも（俗）

薯蕷を煮熟して碎擂て沙糖を和し、餅果中ゆ實るものをいふ

いもあん（俗）

女の子の後ゆ生まれるをいふ名なり

いもうと

妹人の義なり和妹和名伊毛宇止

かのひ給へうと思へば又いもうとうきく給つ

上ゆ同じく男より姉妹を通じて呼名あり

いもがらんふ（枕詞）

源帚木我いもうとのひめ君いとのさだめゆ似るよしゆ

在所詳ならず

万十二伊毛我伊敝尓いくりのもりの○妹が家ゆ行くとつづけたりいくりの森

いもがかど

催馬樂呂の曲名中ごろ絶たり河海伊毛呼々度世奈呼々度由支須支呼爾天

いもがかど（枕詞）

万九妹門入出見河の万七妹門出入の河の○妹が家の門を出入とつづけたり泉河又

疱瘡の痕を

いもふ

入乃河のひろけて枕詞とゝ〜たるなり泉河の山城國
相樂郡にあり入乃河在所いまだ詳ならず

いもゞかと 枕詞

詳ならざれども上小竹葉と詞をそへたるなり樹山を古歌著樹の山と
いひしなり紀の山を妹が袖巻来の山とのひらゞ〜たるなり同例あり

万十二 妹が髪上小飾葉野の○髪を結束ぬと
いふつゞけなり小竹葉野は地名なり 在所

いもがまくる 枕詞

ある山の名
なり

万六 妹が著三笠山の○笠は著るものなる
るゆゑにかゝつゞけたり三笠山は春日の

いもかけどうふ 俗 ○やまうげどうふ
○やまうけどうふ

うどん豆腐か薯蕷汁を
被たるものをいふ

いもかど 三河 俗

ぬるゞの下か
注也

いもきゞる

竜膽の下か注也 能因歌枕 ぼんたう
をばいもきゞるといふ

いもがさ

もがさの下か注也 栄花物語 ことゝ〜しいも
がさとのふ物おこりぬゞ〜ととつゝ〜しの

かたなのふるたと〜よりやまけ
なりとぞいふなり

いもが〜ら ○おやいも
○ふものかゝら

芋の根塊をいふ○芋魁
以字 蹲鴟 イモガシラ

いもゞそで 枕詞

万十 妹が袖巻来の山の○妹が袖を纏ひ
寐て歸来たるとのふ意のひらゞ〜なり、

さて巻来山とは地名なるのか見えざれども紀山か巻来とのひらけ
たるなるべし上の妹が髪上小竹葉野なるゞ同例なり

いもゞてを 枕詞

万十 妹が手乎取石池の○妹が手を取とのふ
意なるべし地名のとゝ〜かのひらけを枕詞
とせり取石は聖武紀か和泉國所石
頓宮とあるところなるべし

いもがひ 俗

今名螺類なるべし形芋の子か似て頭太く
末細〜品類甚多〜故か大さ一様なるべし
其質白色なるべし赤斑
黒斑等數様あり

いもゞひも 枕詞

万七 妹が紐結ぶ川内を○古へ男女互か
下紐を結びあひたるゝことあるをもてかく

いもゞけたる
なり

いもがめを 枕詞

万八 妹が目乎始見之埼の○始見之埼在所
詳ならざれども妹を見初るとのふ意か冠らせ

たり目とは相見るよりいふ事にて古言に君が目を欲すなどあるにおなじ

いもがゆ　薯蕷を煮て甘葛蜜餡等を和し煮たる粥をいふ【宇拾二】そのかみ米の座にていもがゆとをとしてあひといふでいもがゆにあらん【厨事類記】薯蕷粥はよきいもを皮むきてうすくへぎ切てあつくしていもをゆるべし いたくゆるべからず又よく甘葛煎にてあるとぞ

いもがら　○おほいも ○ぼねき　芋の茎をいふ後世は紫芋九面の茎の生なるとぞおきといひ乾したるをいもがらといふ【和】蔌 以毛加良一云以毛之【大草料理書】但ふくきみその時はいもがらもよし

いもがり　きぬ【拾冬】思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥鳴くなり　妹が許の意なり【万十四】ふじの根のいやとほながきやまぢをも伊母我理とへばけによばずきぬ

いもこ　伊賀 若狭 ㊗　魚名、やまべの下に注せ

いもご　佐渡 ㊗　ぬかごの下に注せ

いもごみ　米粉に薯蕷を擂交昆布に包みて煮て小口切にしたるをいふ又いりこの中に薯蕷をきしこみたるとみそにて煮たるをもいふ【朝倉邸御成記】十六献えびいりこいもごみ

いもざけ　山薬を擂り酒に加へたるものなり【年中定例記】又焼栗九昆布九きり四十いも酒百日参候

いもし　鋳物師をいふ【宇吹上下】これもいもしの所などこどもあつまりてたらふくのこがれ

いもし　いもしかまをさ【宇拾二】あるは七条町に江冠者が家のおほひんがしにあるいもしが妻を

いもじ　いもがらに同じ【内膳式】芋茎二把【土佐】いもじあらめもあめもあし【和】蔌 一云以毛之

いもじ　いかの異名、烏賊の下に注せ【大上臈名事】いか、いもじ

いもせうとめ　妻の姉妹をいふ【和】姨 和名一云伊毛之宇止女

いもしかご　常陸 ㊗　ぬかごの下に注せ

いもせんだよ　㊗　薯蕷又佛掌薯を擂し豆腐を和し茹でたるものなり

いもがり

虫名いぼ訓ゑりの下ゐ
注ニ慶節螳螂
ところゑるゐ同じ
類聚往来署預汀

いもがる

いもせ

命婦背ニ往嫁繼綴ニ後撰雑下はらかゝの中ゐいろゐる事ゐありけん
常ゐゝぬさゆゑにえけもぞむつまゝきいもせの山の中ゐきえ魚ゐろる雲の
たもとぞもあるゐゐ源末摘花わがそでゐふぶきゐ
いとゞゐゝきいもせとゝえたり

いもせどり

あまゐゐ切ゐる時に鶯ゐも
とつぐとゐへり

杜鵑の異名なり雜和集中十一ゐいもせ鳥と
いゑ此鳥きゐめゝとゐきゐれへゐ鳥ゐて

いもたけ俗

蕈類白松露ゐ似て質硬し栗の毬の如く樹
下の鬆き土の中ゐ生ず味美あり近江ゐ産ニ

いもだこ俗

章魚と芋と并せ煮たるなり章魚の性芋
を好む因て共ゐ煮ゐ其味互ゐ美ある故なり

いもつぎゐも俗

薯蕷ゐ麹を和し少しづゝ摘切
茹たるものをいふ

いもでんがく俗

芋を串ゐ貫き味噌を抹り炙
たるでんがくをいふ

いもと

妹ゐ同じ

いもとゐも

催馬樂呂の曲名催馬樂譜伊毛止
安禮止伊留左乃也志乃

いもゐ孫

いゐ婦ゐて親敬ニる語也万九とゞきろの
麻をひきゐ妹名根之作きせけん

いもゐのも

薯蕷を煮熟し削て上ゐ膾を加へゝるもの
なり武家調味故實いゐもゐのもをとゝかをけゐ
ゐる樣いゐもをもゝかをけゐ

いものかゝら

いゐがゝらゐ同じ庵主碁石訓の大きゐる
いゐのゝらをとり出てやうに

いものゝ

いゐもゝゐ同じ銅鐵鍮石ゐど鑄と
器を作る工なり古節鑄物師

いものは

いゐゝゐゝらゐ同じ庵主こまどゐのはゝ
といふぶきをもちのあゐをやおゝん

いものをこと

女を親を敬ひ稱ニる名なり万五こゐらめしき
伊毛乃美詐等のあもとゝゐもゐゐゐふせゝをゝ

いもは 伯耆 俗

草名なるべの下ゐ
注也

いもだたけ

芋を種たる畝をいふ 藻八 あるこ
草云云いもばたけ

いもむしり 大和 俗

虫名やまとのもの
下ゐ注也

いもひ

いもふの體言なり 字忠 たぐいもひ精進を
給てわがこゝをゐあひとんとあをゐることゐひ
給ふ 原幻 御正日まい上下の人々をゐいもひ精進を
養せをゐ給ふ 又集 ゐ稱のこゝろ
夫雜十六 万代ゐ久しくうけよ神垣や年も
うゑてゐぬ君がいもひゐ 字鏡集 齋イモヒ

いもひのゐと

齋の場あり 續後撰 釈教 ちゐこのいもひの
庭ゐあゐれし草の延ゐけゐゐ為ゐこん

いもひのとこ

齋の中寢る床をいふ 鴨長明集 ゐこ
ゐ見ばいつゐる物をあふことゐるいもひの
床のゐたこうきゐ
ゐゐ

いもふ ヘヒ ヲヘ

いもとのべたる詞あり身を清めてゐを
つゝしむをいふ 河海 神垣ゐひもつ絶ゐこと

いもへども人のこゝろゐ
まもりゐへね物を

いもわり 俗

農を罵る語より出て四民ゐ
通じ呼ぶ無知の稱あり

いもまき

製作詳ゐゐ也蓋しいもごとの別名ある
べし 政要廿八 薯蕷卷 類聚往来 芋蕷

いもむし 俗 ○ちゐ

虫名形蚕の如くして大き一二寸ゐり三四
寸ゐ至る色緑黒の二種あり後羽化して
蝶ゐなる品類
甚多し ○蠋

いもめし 俗

芋又甘藷を細切し飯ゐ糅たき
たるものをいふ

いもらがり 枕詞

万九 妹等許いもらがの嶺ゐ○妹らがりい
妹がもとゆといふことゐて妹がもとゐ今
来とのひ冠らせたるなり今来
嶺い大和高市郡ゐあり

いや

弥の意ゐをいゐ又 イヤチ といふ意ゐて
最の義ゐり 記中 天皇云云御心知伊須氣
余理比賣立於最前以歌答曰加都賀都毋伊夜佐岐陀豆流延表斯麻加
牟又阿斯波良能志祁去岐表夜迩須賀多々美伊夜佐夜斯岐豆和賀

布多理泥斯 万二 弥遠ゆきとしさりぬ益高ゆ山もこえきぬ 古今雜體 あら
もこだまして霜氷いやうたゆふたちゆ風波
のあやふ
けまど

いや 俗

やといふ驚嘆の辭ゆいの發聲の加り
たるあり イヤハヤ イヤモウ あどいふ
否の轉まて嫌ふ詞あり イヤ ゆある
などいふ是あり

いや 俗

父族のまるのことをいふ

いやいとこ

和 再従兄弟 和名伊夜伊止古

いやく

否々あり 落窪四 北のうたいやく〜まゝ子の
とゝもあん見るきゝう給へ此あんあるる子

ゆあゝゆゝこと給ふる 盛衰四十六 ときは手をあうのそ
いやゝゆあゝ此事又人ゆうたう給ふる

いやあひ

成りぞゝゆ
ける

三月なり 彌生まて草木日ゆまゝてあげ
るといふ 清輔尚齒會記序 うけるを兄二とせの

いやあひのつた

春野遍のくさのやあひの月林の鶯
えうあもとまるこゝろひ

いやうと人

人馬いやうと人ゆ
あるるあるる

彌の義うへ上うてそのうへゆといふ
意あり 太平三 東西の坂ゆ人あるれをつたて

いやく 音

藥をいふ又轉ゝて療治をもいふ
職員令 侍醫四人掌供奉診候醫藥上
卑賤の義
あり

いやゝ シ シキ

いやゝあるを
いやあり

いやゝる リ リル レ

万四 いうあゝん時ゆうるをむぐらゆせるむ 又五 伊夜
之吉ゆうぐを 伊 身いやゝゝうぐゝ 母ゆん宮ありける 源帚木 あゆがゝゝぐいや
ゝたいうあゝたうあゝうあゝ 織屋戸ゆいりゆるせるむ
かゝぬぐやをゝうゆ身をるてゆ 又東屋 いやゝゝくゝてゝゆう
ゆゝんあゆゝがをんあぐとゝそのゆゝうもたう孫の給ゆあを
今昔十五 苟ゝくも將門 拍原天皇の五世の末孫也
賤き名あり罪ありて官位を下さるたるを
いふ 後撰別 平のたゝとゝうゝいやゝき名とゝて

人の國へやらうけるを　又旅　ある人のやーき
名とりて遠江國へやるるとそ

いやーく　カキクケ

彌重の義にて多き意なり　万四　はるの雨ハ
彌布ふるふるめの花のゆるさるあくいとらとら
ふも　又十九　やーとるきとも　伊夜之使　あるきぬ　又廿　新しき年のたびめの初春の
けふふる雪の伊夜之家ゆきて　續拾冬　真柴ふる道やたえぬん山ろのいや
したふるる夜はの
ちく雪

いやしまり　マミムメ

彌結あり　結りの堅く執持て弛緩つぬ意
なり　續紀三　淳明心醒　彌務ハ　彌結ハ
賤しむるて　見クダス　意
なり

いやしむ　マミムメ

他ハ　見クダサレル　意
なり

いやーまる　ハルルレル

字　微　伊也　宇　拾十二　仍寺僧ふ　てこのやーまて交會ゆる事ハ　平家二　せんぐ
のもくだのふくーまてこそいやーまれたるもくだのよりとらもう
ちのきあるまで

いやーも　サシスセ

病とあわせをのふるふ　十訓二　隋隻やふれ
たる蛇を見て藥をつけをのやも蛇をとうと

去ぬ　法然上人行狀画詞　大師上人の病脳をのやーー給へとねんごろハ申のへ
徒然草　あむ藥師のやくせ給へ世中ハあり　ちらつも病ハ　菩提心集
病をのやも方術ゆうり　醫心二　偶然
治養一　病則昂頭載面

いやちこ

いやつぎ

いやつぎーく

きの彌繼　嗣ふたるゆうーたるゆ
神のこことうけきろるのやつ
ちくーハ世を思ふるな

いやとこーへ

しへふるのう
まろくん

いやとこーのは

又十七　ふせのうみのおきろーらる
ぞん　新勅神祇　八重榊　あげた惠の數をへとのやーーのはハ君をとのーん

彌毎年の意なり　万十　はる霞たろうもちら
のとのきくへり我ハ相こん　彌年之黄土
ふるるとあうーるよひ伊夜登　偶能渡ハ　ふるーーぬ

景行紀　時天皇
謂之曰灼然　灼然比弖知
彌繼　ゆて永くその跡を繼ゆくとのふ　續紀十七
御命ハ坐世伊夜嗣ハ奈　御命聞看止敕夫

いやつぎ同ー　万一　わるとゆーー神のことく
つぎのきの彌繼嗣ハ　又三　ちぐふあひくるつぎの
神のことくとうけきろるのやつ　新後神祇　ちぐーくろの
ちくーハ世を思ふるな

彌常　ゆて彌長久ハの意なり　夫廿四　世々ろ
けてハはふるもろの神やつことこ

いやちの花 安藝俗

木名はこやのあだの下に注せり

いやは

最端なして殊に末なるをいふ 記上 明伏 最端和邇捕我悉剥我衣服

いやはて

彌後なして最後の意なり 記上 最後 其妹伊邪那美命 又 最後之来

いやひけ

彌日来經なしてあるこの日を經るを云なり 万三 常なりしあるひなるひに彌日異に

かはらしふるまゝに 又上 ゆきて川水ゆたにまさるかも

いやゆきうり

彌増うなり 落窪二 あめいやゆきうにふるきまゝに 又四 ちぐさの車いとゞこそいうめしう

あれたまへば御徳いやゆきうりあり 伊 思ひいのやまうにふるきまゝに

とゞ戀い猶ものひとてもあぐくさうあることもなし 拾遺戀三

いやゆき

彌増なり 三實 天下波 愈益 平々 伊 あ

思ひまさるを哉 夫三 いやゆきに夜寒ゆも

べよりそもらるあれのいやゆきに君に心を

あるゝ浪のうち衣の嶋の秋の浦風

いやゆきも

いやゆきの否なるこゝろに其様子をいふ詞なり

唐物語 ことばつきなどあてその數なり

あるゝたの御心ゆのやゆきに

いやゆきうしく心うきを事うそあり

いやゆきもち

彌益々なり 續紀廿二 夜晝恐麻 侍 乎 伊 夜

益 賀 益 ホ 万六 その山の彌益益ふるのうはの

いやゆきもち

たのもうしきことをいふなり 宇俊漢 時ゆあ

ゆきもちにゆ怒りうそのはゝ

いやむ

否むなるこゝろをいふなり 宇拾三 國司

むつうり國司も國司ゆこそよれこまとらゆ

かういいつゝそこと

いやをもひて

否目なして憂ひたる目つきを云 源 早蕨 あた

いやめ

へうもと聞たまふひそかに 又 靖蜻 人 あれたゞ御病の重さをゆのこと見せてかく

ものゝ目のやうにうち

らしき年ともものそこのあゆんなり給

児どもものやうにうち

ひそかのまに給ふ

いやもて

人を嫌ひむる

俗

いやもの

擧動をいふ

嫌ひしき物と

俗

いふ意なり

いやらしい 俗　いやしき色めかしふるまひ

いやる　ラ リ ル レ　矢を射遣なり　平家五　ふせぎたゝかふ兵ども いやりたるとおぼしき時は四方などくぞ笑ひける

いやそうなし 俗　人の否も諾もあるさへせず強て為るをいふ

いゆしゝの 枕詞　けものをいふ射られたるけものゝ暫のがれゆくも終には死ぬるものなるをもて行も死なんの枕詞とはしたるなり　万十三　天雲のゆきのまにまに所射完乃行も死なんとおもへども○いゆしゝの射られ

いゆる　エ エ ユル ユレ　病のなほるをいふなり　允恭紀　窃破身治病猶勿差　著二　我病温泉の効験をたのむといへども忽にいえむこともかたし　徒然草　めでたきことといふ草ありそこにさしきたる人の草をもとてつけぬればすなはちいゆとなん

類名　瘉 癒 瘥　慶節　愈

いよ 俗　車物を喝采る發聲なり　イヨエライ　などいふ　イヨキツイ

いよゝ　益々の意なり　古今雑上　おいぬればさらぬ別もありといへばいよゝ見まくほしき君かな

源桐壺　いよ〳〵まちかくのぞみをかなへさせ給ふ　六帖六　秋風の荻の葉ともなく音きけばいよ〳〵ひとへに物をこそ思へ

いよかずら 俗 ○からすのひさご　白前の蔓生なり葉形女蘿に似て長く毛なく臭なし秋葉間より小梗を出し数小花を開く五瓣紫黒色徐長卿に似たり角も亦相同じ○蔓生白前

いよいとし　伊豫より産する塩鰯なり　新猿楽記　伊豫手箱　又砥　又簾　又鰯

いよす　伊豫より出る簾をいふ　枕二　いよすだれかけたるをうちかづきてさら〳〵とならしたるも　いとふかくし　又八　けひなしのはしいよすのまきちらしたに　源柏木　いよすだれかけわたしてすびいろの木丁の衣がへしたるすだれげせしげにて　同上　詞花恋下　逢事はまばらにあめるいよすだれいよ〳〵我をわびさするかな　中務内侍日記

いよすだれ　いよすだれまきあげたしてすゞしげなる月はやうく　さし出て　庭訓往来　伊豫簾　讃岐圓座

いよすだれ 俗　介名あしぐひ　なほす

いよぞめ 俗　絹布の染色なり伊豫竹簾を重ね透し見たる形を象りて染出したるなり其

文木理の
ごとく

いよぞめ 俗

木名かよぶところの
下に注せ

いよだつ 刈ツテ

體の毛の彌堅をいふちう 散木下 こゝろの
音のことばにはむせぶタキをいけものゝ
心さもさわ 菩提心集上 さゝもぐ
いよだつむ時ゐ必ず申せ 以字 堅 も堅

身の毛

いよど

伊豫より出る白色すこし軟き
砥石あり 新猿樂記 伊豫手箱又砥

いよめ 阿波 俗

鳥名ゐゐどりの
下に注せ

いよやう

彌やうの意にて木あとの高く
長きをいふ 和玉篇 森ヤイヨカ

いよく

いよく〜といふにもあらず 記上 故自谷以後稍
愈貧更起荒心迫来 方五 よのあらい空しき

伊與餘麻須万須うゐ〜かりけり 又ガ つるたちち
きやけくあひてきめ〜そのあそ

いよやう

いよやうに同じ 字 森々 木長良伊與々加尓

いよう

類名 森カイヨカナリ

いよし 俗

草名ひめよしの
下に注せ

いらい

草名高さ三四尺
茎方にして葉

いらい 音

いらい 音

草名茎にあり茎葉共に毛刺あり
学に似て尖り對生せ又互生もあり 木名 刺伊良 人 和 苛 和名 伊良

触るゝ人を刺せ○蕁麻 字 莉

いらい

○ゐ 来

人をたのみまつる
いらい○倚頼

いらい 俗

草名いらに
ものゝ

いらいら シクシキ

苛々〜きまてはあらぬ〜き厲〜きあとの
意あり 十訓八 いらる来たるぞ〜む報せい

いらく〜ねぐひもとめて

慶節 苛々 敷

いらう

うとつ〜うつけ 和 覧 和名良賀 伊

在上農家屋也

家の屋根の瓦あり 榮 駒ぐ いらつ〜へうり
もぐもたる所にあたる〜〜紀花のいら

いらごの〜

苛悲うとくつくもあげく意あり

字類又瘧伊良加志

いらごさ俗

草名いらゝ

あゝ〜

いらゝ

いらゝそ

天武紀下詔曰諸國貸稲物とうゝて利息を取ると云ふ天武紀下

先知富貧簡定三等乃中戸以下應與貸

霊異中息イ之良

サシスセ

いられうあぢ俗

魚名、竹筴魚の一種大さ三四寸あぢゝ似て皮厚きものあり

いられうぶで

顆の扁き念珠をいふ法躰装束抄念珠まろ

せゝあり鈍色の時いらゝたるもゝをぶるもれぶも

いらろ俗

苛の意あるもゝをいふ

○焦燥

いらろこ

いらゝいろゝ同じ〜愛と親とを呼稱あり

億計天皇諱大脚字嶋郎

男をいらろこ女をいらつめといふ仁賢紀

いらろひめ

上ゝ注也雄略紀大連曰

此娘子以清身意奉

いらつめ

上ゝ注也景行紀立播磨稲目

大郎姫郎姫此云異麻呂

いらな俗

芥の一種葉大きくして微紫色周邊ゝ

細き鋸刻多き者をいふ○花芥

いらゝあき

苛きの甚きて厳きをいふ宇藤原君天の下の

いゝあれ軍ありともうちかちすむや大和

きさいの宮もいとのたうまれ給ふ

十訓三いらなれもそうゆよるべきものあり

ゝふるまひて徒然草數珠ゝ

結びあまどゝいらなゝふるまひて

いらゝあけれ

苛甚〜あり記中伊毛表泌母比傳伊良

那祁々曾詐爾泌母比傳加那志祁々万十七

うゝ〜けゝこゝゝふ思ひで伊良奈家々こゝふ

ゝもひでゝけゝもゝやはけゝゝゝ

いらゝね

草名れうの下ゝ注也大同類聚方殘篇以

良稱今云須

いらひどれ俗

甚〜とのふ

意あり

らうふ ハヒフヘ

舉及賣 雜令義解 謂子孫弟姪等不得輙以奴婢雜畜田宅及餘財和自質家長物以其爲質舉而求利也

らうふる ヘフルフレ

らうへさまする セスルスレ

竹 翁のらうふるやうなる給ひをつるさかうふりも我こそとこそまろ〳〵でいかゆるせむ 枕五 そもそもひぐ〳〵しきものを給もぐあやこと事との給ふ〳〵くさせ奉らんとあやたゞびきこえ給ふ 大鏡八 はぐ〳〵き事をも見給もぬものをらとのらふまぐ 閑居友上 たそとのらへらもけり

らへ

物のたゆへとのらへもせぬ 枕九 のらへのきこゝはぐ〳〵とも思ひこゝ 源相壺 よろづのことをちぎりのたまへとのらへもきこえ給ちぬ

らむ ○あこぜ ○ちんきゝ

虫名長さ七八分形扁く黄色ゆゝしく白沫を樹間ゆ吐て雀卵の如く即雀蹠あり

夏ゆ至り蹠上孔を穿ち褐色の蛾ゆ羽化して去る○蛄蟖字 蜋蛉良

らむのせ 俗

虫巣名ちごとのつゞの下ゆ注ぬ

らめく カキクケ

苛めくるめてのらく〳〵ちるあるうゆうゆるるをのふ

らかせ サシスセ

今音 撰本 狐の思ちく耳を指見下〳〵て獅子ゆ乗て象ゆ左右の口を取らせて 宇拾九 おをもとりあるる猪のいで来て石をはらく〳〵とらてけべ火きらく〳〵とのづ毛をのらかく〳〵てはく〳〵て かる 續古事談上 御ひげをのらく〳〵て事の外ゆ御むろくりありけるべ

塵添壒囊抄二 石のかどあどのいらめきたるのうゆうちをのふ又のうゆ毛髪をたろるをのふ 長明無名抄上 らびちをのらく〳〵

らぐ カギクケ

見ぐ〳〵うあちる鼻うちあふぎのらゆて穴の大きなる事い左右ゆ對たて寢殿もつくりつぐ〳〵のどのへべ 源手習 こゆ〳〵いらゆたるものどもき給つる〳〵もとをう〳〵きるる 又橋姫 のときむけゆ のらゆたるうつきく〳〵てもてるる 慶節 利鬼

らてぐる

此物のちぐ詳なる 本和 羊挑和名以良 良久佐

いらいらがる　ケクケクク　いらいらするをいふなり［落窪二］鼻の穴よりは

［太平廿六］めをいららげはがみをして人とあり　ぬべくふきいららげてふしたるに

四方を下知せられけるに

いらりこ　㊗　草名いら草げの下に注せ

いらる　ルルレルレ　所煎の義より出て我とわが胸中をいるが如くおもひいらるをいふ［宇 蔵開下］えんあるほどく

いかなることにか深くおもひいられていらだちあり給へどかくうたてもそこ

まかでもすれいるやうにて［源 夢浮橋］いと心よどみけれどもかしこうちうけに

いらちもんもさまあしければ［枕三］おとなだちたる人はふときこしめしよし

おほかりやせいらめきたるは心のきよきたらむとおもしはかららる

いられがまし　シクシシキ　心の煎(イラ)るる如きさまをいふ［源 胡蝶］兵部卿の宮のなどさまりいられがましきわびごとどもを、

かき集め給へる御文を御らんじつけて、こまやかにいらひ給ふ

いらり　㊗　撼の轉なり俗に扨の字を用ゐるなり

いらり　㊗　いるの體言にて商家の詞なり家に入る財をいひまた戯場(シバヰ)観場(ミセモノ)などに来人の

多少を［イリ］多し　おほきといふ

いりあひ　㊗　日没をいふ日の入間なり［伊］けふの入相ばかりにたえいりして又の日戌の時ばかりに

あんからうじていき出たりける

いりあひのかね　入相の比寺にてつく鐘の音をいふ［新古 春下］山ざとの春の夕ぐれきて見れば入相の

かねに花ぞ散ける

いりあや　舞樂の手にて再びいりあやをいふなり［源 紅葉賀］手をつくしたる入あやの程ぞそゞろ

寒く此世の事ともおぼえず［河海］舞有取綾手故云入綾［散木上］わがまぎに

ふれたむかし山をたづぬらん入綾の聲やけふはかざるらんと

いりうと　㊗　○むこふ　寡婦の家に贅(ムコ)となる夫をいふ

いりうのはな　㊗　○いりがら　雪(キ)花(ラ)菜(ズ)を炒り調味したるをいふ

いりうみ　入海の義なり大海より入こみたる海をいふ［新六三］入海のせとの崎なる高巌(イハホ)に

いりあいこと　汐風

いりえ　入江　延能波知須 万十 あ〜たりのさらぐ入江の

あ〜ちはげのあ〜まむあと　こもりたるかも

いりがく　俗　同ド

いりがくあべ　同ド又

いりがら　俗　いりがらとも云ふ

いりかんどう　俗　鳥名、ちどりの下に注す

いりかよふ　イヒカヘ　立入り往来する意あり 万十一 玉だすきのとまと

のまけきに入通来根たちち移の母ゲとも

さぶ風とまると　さむ

いりがら　俗　鯨肉の油を煎りたる後の

者あり食用ふまと

いりがら　俗　食物、炒りのことあり

いりくち　俗　山口といふに同ド

いりくもの　物　物の初めをいふ

いりくむ　俗　事物の錯て紛れ

たるをいふ

いりくんぞよ　俗　いりくんぞるを

いふ

いりふうた　詞の入りたるひて心のつ〜ねりぬる意あり

定家卿消息 深く心をのまんとねがひまぶせ

いりもみの入りたり歌ゝと堅固ある〜ぬ姿の心得られぬい

心あたりいりたるとくゝぐるまきことあて侍る

いりこ　○ちりもの　土肉を施日に曝して堅くなりたる者

和 海鼠 和名古本朝式加 賛字六伊里古一　なり○海参 主計式上 贄海鼠八斤十両

いりこのふとに　食物煎海鼠の首尾を去りたれどもと

式三献膳部記 煎　煮たるをいふ今い醤油を用ひて煮るなり

海鼠、太煮

いりごひ　俗　食物、製作のりたるもの下に注す 料理物語 煎

鯉も右の如くつくるなり候

いりごめ 越前俗
やきぶめの
下に注せ

いりごろ 俗
同ト

いりざけ
酒に醤油を少し加へかうとぶ〜を入れて
煎じたるもの 膳軒に用ゐるもの又梅

諸を煎じたるものをもいふ 大草家料理書 鯉を細くそぎ細作りゐ〜とのりぶひまと出もそうり

いりあり
エる潮をいふ 新六 入あわのひらこにきわる
ととぎすをとのきりに出るあやまりやうん

いりあり
炒たる食鹽あり 大草相傳聞書 かま
ぶくに云云いりぶわに水を少し加へ

いりぶと
炒炙りて火の移りやすくあるる炭をいふ
枕八 見るにことあるることるき物のもじに

かきてことぶ〜しき物いりぶと
いり炭おこすものと久〜

いりぶと。いりがく
又 ととにに

いりぶとあるる
はこあり

委角の角に又一條の凹たる條あるをいふ
雅装 こみはと四ぐふいうちの同じさあるに

いりたち
成範卿事ありて召返さるるを内裏に参られわうけるに むろ〜の女房の
いりたちあるうり〜人の今いさるもあるぶりけるに女房の内よりむろ〜を
おもひ出て雲の上いあり〜昔に見しうるはの内やあか〜き

簾中に入立て女房と同座を聽さるを
いふ 禁秘抄 聽入立之人、定聽直衣 干訓

いりたち
名判ツ刊
其場にあたるをいふ たち立
なり 記下 意富峡美能詐々呂表由良美淤
美能古能夜幣能斯婆加峡伊理多多受阿理
土佐 京ふのりたちとうるて

いりたち
名判ツ刊
其家に出入往来するをいふ又轉じて
あたる〜くるるものをいふなり 源氏物語 さやう

ある心ぞせある人こくらの中にあ
う〜 枕十 あるやけ所ふいりたち
こそいえうてあるもひ給ちめ 又六 山の井の大納言いりたる
御せうとあてもいとよくあはせ

いりたひ。ふくめたひ
食物、棘鬣魚を炙りむありたるものを云
料理物語 さ〜みより小〜厚く作り候
鯛あてもの鯉あてもの子を半分
あと〜たと〜らに出〜さるるれひも子も入やぶてもり候ゑえ過き

候へ〳〵あり〳〵く候

いりたまご（俗）　食物、雞蛋に醤油酒を加へ鍋にて炒りたるをいふ

いりつけ　煎付たる食物にて惣名なるべし　朝群七　煎付　常盤姫物語　ひきわり、いりつけうけ

こふくはぐやなし

いりつけやめ　食物、煮染たる大豆をいふ　以字　煎付大豆マイリツケ

いりどうふ（俗）　豆腐の水を去り煮て醤油等を加へ炒りたるをいふ

いりとり　鴈皃等醤油酒にて炒りたる食物あり　料理物語　鴨をつくりまぶりをとりて後に

身をいりたり〳〵たまり　うばん〳〵とに申候

いりな（俗）　菜を煮たる羹の名なり

いりなべ（俗）　○いりごら。やうろく。物を炒る扁き器　○ちやわうご。いりがら。こうら　鐵又は土にて造る

〳〵もの〳〵名あり其形一名〳〵也

いりあと　沖より入る波をいふ　新六三　汐むかふうげの渓の入波にあへる我身の出ぶねの世や

いりひ　入りたの日をいふ　万一　さるうとの豊旗雲に伊理比きし　こよひのつくよあきらけくこそ

源花宴　やうく入日にあるうとおぼむ入日をあらふあきらけくとを　新古春上　あとの海の霞の間より

いりひあと（枕詞）　万二　入日成ぬる　又三　入日成隠れ　〳〵ぬる如といふに同じ古語あり

人の死たるを譬へたる枕詞にて入日の如く隠るゝといふつゞけなり巻二

あるゝ人磨が妻の死たるをとうとめる歌巻三あるゝ家持の妻の死〳〵

たるをとうとめるなり

いりふせ　サイシセ　寝所ふいりて臥せをいふ　源末摘花　めのとたちあの人あどんざうしふいりふせ

の御前ふ男いりふせと侍り　狭三　媛君

いりぶち　海河あるとの入こゝて水の深き所をいふ　万十三　淵潭ふかやせるきこをけふ〳〵ここんと

まろ〳〵むつま〳〵
うま〳〵

いりわび

あり明風のタぐれ露ふけて雲たけてあどいふ風情あり 遊庭秘抄 近来の心の入たる事實に遠ざかりたるをいふ 八雲御抄六 言葉のいりわびといたるべし霧の人の入わびぬるあうあどらせまきくはゝに蹴る人の足あるべ〳〵 定家卿消息

あまりに又ふ〳〵心をいれんとて徒ちたぐせば入わびの入らり歌とて堅固あ〳〵ぬ姿の

いりまめ

豆 厨事類記 うちぐりいりまめ 食物煎炒たる大豆をいふ 新猿楽記 熟梅 和胡荽黄酒濁醪肴煎豆 庭訓往来 納豆煎 大豆 咲太郎自然の事あ〳〵腹きゝんとまたる思ひまて 精進魚類物語 煎

いりむぎ ○むきこじ ○いりこ

大麥を炒り熬〳〵磨たる粉をいふ 以字 麨イリムギ

いりむこ

いりふのり 武士のがり入むこ〳〵とけり 桂本氏系圖 ちぶ川のあゆ〳〵 女の家に入て其家の婿とあり子とあるをいふ妻を已が家に迎ふるに異あり故に入と

いりめ〳〵 カリキクケ

人をいりそ〳〵たつるきあるをいふ ふありいりわいりもむのいりに同じ 宇拾十五 うあうあぬまをも

捕をつたあど〳〵給へ〳〵と
いりめきまひ〳〵

いりもの

食物煎煮たる肉をいふ 和 膳 和名抄 毛乃 以少汁臘也

いりもの 俗 ○いりごめ ○まめいり

食物米并豆を炒り沙糖を和〳〵たるをいふ

いりもみぢ

紅葉のふるたをいふ 呉竹二 いりもみぢ ひら〳〵や色のこき紅葉也

いりもむ マミムメ

煎り揉むを煎ゞ如く揉むゞ如きをいふ 源 碧 ひ弱もきふのりもみのつる風のさゝぎ

ふ 栄 鶴林 人あるぬぬるをつたに佛云云西の國のあ西領とて母代あ

佛をいりもたるをまつる狹 四 宰相の中将い

ぐやゝといりもと
思ひけるべ

宇拾三 此人をめるせ

いりやき

炒熬たる鳥肉をいふ 料理物語 いりやき、鴨を大きふつゝり、たまりうけあきて皮を

いりあぶやゝ事也

枚

いりい 俗

焦飯を湯に入る香を付たるものをいふ 瀧あどに用ゆるあり

いりとけ 俗

入割の意にて車物の紐き理をいふ

いりとり 俗

同上

いる イル

イリワリライヒキカセル あどいふなり

所須にて物の無くてあらまほしきをいふ又轉じて費やすをもいふなり

御几帳ひとつぞいるべらめ

うちのおとどの孫いるべし

又 摂の上 そもそもふしぎのいるべく侍ぞ 発心集 一日の

ものらはくるべくこそ侍らめ

いるんこと候べくんぞの給はせよ

落窪 三 尺の

宇 藤原君 はべりけるとこ

いる イル

銅鐵をとうていぶたるものにて器を

つくるをいふなり ○鑄

いるもの セズ

他をいるもの

いふなり

拾遺 賀 鏡のうせもべりけるを裏ふ鶴のうたをのせもべりて天 廿二 てる月を

浪のうへにて見る時ぞやまもとの鏡鑄るべちもの

更科日記 はじ一尺の

鏡をのうせて

いる イル

土器鐵器等を火のうへふ置て物をあぶるを

のひ又煮るをもいふ 宇 國讓上 藤壺ふ鮎ふ

ぬ魚のりてやまもり給ふ

字 教 伊留

いる イル

いるもの セズ

他をいるもの

いふなり

同上

いるむる メムル

他ふいるむる

いふなり

いらる レル

我がものべいらるる

いふなり

いらるる レル

竹 露もそそふりけるべふとい殺給へ云云あの國人え戰ものちり、弓矢

していらるべ 源 纂上 例の小弓いるせたるふ 十訓 九 高倉院の御時御殿のうへ

院にて人々あつめて弓いるせたるふ

鵠のうきけるを云云或人頼政ふいるせ

せる弓ふ矢をはげていんとせ

けふいるべ

射のこ

公事根源 四府ふ

太平 三 はじ

いる イル

湯や水をそそぎかくる

いふなり

いきもする セ ス スル ス

[靖中] 夢ふるまがはらの内あるらもあはあり沢で肝をとるもむ是を治せんやうい
あるもこふ水あんいるべき [大鏡] こらもも〜どもの大小寒の水を御ぐ〜ふいきせ
給へと申けもぐ [儒門車親方古訓] 沃ニ
以寒水

いる ラ リル レ

物のうげふいる又ちの場ふいる
あどのいるあり○入

いもする ラ リル レ

いりあるを
いふあり

枕六日のいるやどふあきさせ給ひて [竹] 玉の枝をぐ長びつふいもて [源] 相壺
よくるあるあとぐふいふせ給ひてもも [中務集] よとともふり〜やたもら〜たぐ
ためふ火ふも水ゆも
いもする心を

いるる

択字 [鮪] 甲加 留
和 [鮒] 和名抄 伊加

いるるのうをの下ふ注を [出雲風土記] 嶋根
郡云云凡南入海所在雑物入鹿和余須受

いるかせ

緩めて厳ふ〜ぬるといふ [繼體紀] 臣等爲宗
廟社稷計不敢忽 [水鏡中] いふぐももてとぐ

いるるせゆい
いるべき

いるるのうを ○いるる○ゆるる
○ゆるる

厚〜〜と油多〜〜○江豚
[記中] 鼥鼻入鹿魚既依 [下] 浦

入方をいふあり [源末橋花] さとうぬうげとぐ
みもど行月のいるきの山をたもう尋ぬる
物を入るを
いふあり

いるる レ ル ル レ

他をいて入もさもるを
いふあり

いもさする セ ス スル ス

他ふいれるを
いふあり

いもする レ ル ル レ

[古今雑下] あるあるくふまがきるも月のかるるう山のはうげていもさもあう
あむ [竹] つばらうめの巣ふ手をさ〜いもさせてさぐるふ物もあ〜と申せ
又かるびつのふてふいもてれ給へべ〜もあるを御腰ハをれふけり [源契]
宮あい北あもてのひとまげきうたある御うどいのり給ちもかうぐ〜
けもぐ西あるること〜〜〜ふを人のもさせ給ひて [元輔集] らるもも
戀〜〜うりける月影をいる山べのつ〜くるもあるうな

いるる 音
衣類あて衣服の
總名なり

いるね 音
人と禽獸の間の如く類の異あるを
いふ 運歩 異類ヰル

いるねいぎあう 音
形狀の異ある物をいふ又轉じて俗に種
々ゆゑ〳〵と類多きものをいふ 太平五 ある人ハ
らちぞ〳〵すがりてとびの如くあるもあり或ハ身に翼ありて其形山
伏の如くあるもあり異類異形のそけものどもがかたちを人に變じ
たるのてそ
ありける

いれう 俗
病を愈さをいふ 職員令 醫生
卅人掌學諸醫療

いれかたびら
雅裝下 衣笥の蓋をあけてあ〳〵
かるびゝのてらひゝぶゝものうらざ〳〵あたなり 又 いも
あるうらあり夏はきゝゆて
ひ紛りうさねたり
衣服なと笥に入るゝものをつゝむ料
の衣をいふ今のふくさの如きものなり

いれがと 俗
髪のまゝあたるものを入て
結髪まるなり ○義髻

いれこ 俗
器物の中に又入るべき器をいふ食器
などに多〳〵所予の義なり
上の器より出て人の心に含こねることと
なりて其實を說ざるをイレコノアルハナシ

いれこ 俗
なるどりふ
あり

いれこぶけ
所予魁の下に注ぎ廉内子魁を
讀たゞへたるなり

いれこもる 刂刂紀刂刂
物のあるに入もてことめあるをいふ 源東屋 屏
風の袋に入もてことめたる所々によせうけ
罪あるもの〳〵身體に後のあるしに
墨を刺ものゝふ ○黥

いれずこと 俗 ○あるもの
刑の黥しに別あり多くの針を攢めて身
體に入物蟲魚等の圖を刺〳〵画きその
疵に黑青朱等を塗り入もてと身の飾とし且痛苦に堪たるを
誇るゝ爲なり市人の勇壯を示ものゝまるるなり

いれちがひ 俗
大變
いふ

いれぢゑ 俗
人に教らもてたる謀をいふ
イレヂエヲツケルあとのふ

いれば 俗

齒の落たる人假の齒を造作て入るをいふ

いれひも。どうまんむすび

裝束ふつゝる紐あり 雌雄紐 ゝそもり あわせさゝいるゝあり 六帖五 のまとひものさゝふまどらゝゝいも紐のあるゝ心ふのざむ其ゝん 古今意 よそゝゝて

ひもあり ゝちゝゆゝて さゝ入る紐あり

いれひもの 枕詞

古今意 のまひものあるゝ心ふのざむ其ゝひゝん 六帖五 のまひものさゝてきゝつまとゝ

○いもひもゝふはべて輪紐へ長紐をさゝ入て結ぶをいふ故ふ

あるゝ心ふ結ぶ又さゝてゝとゝひつぐけゝあり

いれぞゝろ 俗

身體ふ人名を針まて刺ゝ墨を入て痕を遺ゝ其人を忘まぬ誓ゝまるをいふ遊女

あゝのまる

ゝざあり

いれめ 俗

目のあひたるもの假ふ目を硝子あゝ

まて造り嵌るをいふあり

いれめゝ 伊勢 俗。ざふまる

種々の物を糅て炊さる

飯をいふ

いれもゝ もゝ 音

歌中ふ文字をかゝゝ入もてよるをいふ

中務集 村上の天皇の御時ふのまもゝのふ

世々をへて落らる瀧の白いとゝ

ふもゝ下ふまとのふゝとのまさせ給ひて

いれもとゝひ。あわもとゝひ。元ふもとゝひ

元結をあめて上ふまゝゝぞうと結ぶもと

髪もさげ入元結をまるあり

あひあり童の用あるものなり 布袋記

うゝゝと昔をうたるゝいもとゝ

永正何曾合人を

いれる 俗

苛の轉圭角あり て

穂あゝぬをいふ

いろ

万六 さゝ花の色甘列數 又十二 ゝらまるあのあり濃き薄き淺き

深きなど萬の物ふまたりそのゝり ○色

ゝらゝゝ忘まゝ稱ゝる 又十三 秋山の色名仏惡吉古今秋下 色ゝゝる秋の菊をび

一とせふあたゝび白ふ花ゝとそそれ 伊 紫の色ゝきゝゝをいめゝもゝるふ

野ある草木そゝゝれさゝける 貫之集 雨ふまふ色さゝ やまそ花櫻ゝ

まそ心ゝまふ思ゝるゝゝふ 守 菊宴 のゝゝゝをゝゝくあれど青柳のゝゝふ

ゝゝもゝる緑ゝ 金葉春 ぬゝるゝさゝ人 婚ゝ ゝゝけゝ 春雨ふのゝゝまふ藤の

ゝゝゝゝと思へば 十二 中 立田川やまゝゝゆゝあれどゝゝあわの色染またる

青柳のゝと 風雅夏 風ふたる田のものさゝゝ色さめて入日殘まる岡の松原

○又顔色をいふ 拾遺 恋二 ものゝふの[illegible]とのいろよ出ゆけうゑぶ戀い物やわもふと
ひとの問ゆそ 源 桐壺 中々あやふく[illegible]ぶり[illegible]とのいろゆも出させ給もゝ
あり[illegible]と 榮 きさき匡 御色い
雪ゆろ〳〵うと

いろ

あう〳〵とうふめるひまあだちとのふ 源 竹川 御髪あどの色うろ〳〵たとのふ
榮 きさき匡 御ら〳〵い御ぞういろ[illegible]ぐ〳〵いろ抑の絲のやうゆ 又 捕本 いろ
好色あう轉どうろやきき心をいふ
ようまぐとけぐ〳〵きいろい移うやきゆ

いろ

ものあるぶかく轉ぜ〳〵あり 拾遺 雜恋 染川ごとたゝん人のいろでゝい色ゆ
あるそふことのあゝん 宇 藤原君 いろあるむきあどもあるゝと 源 浮舟 此み
ゆあのとさとが〳〵きゆそいろゆはゝ〳〵ようきるぶ
又 総角 月草のいろある御心あうけり

いろ

うと 源 幻 女房あどもうの御うあ 喪服の鈍色あるとのふ 榮 晩待 鐘 いろの御ぞ
ぎける比毋又身ゆうゆれが脇ゆうたとのいろうぬもあり 續古 哀 大納の服ぬ
袖のあゝだゆ平家 三 夏の事あるぶ何とあう水ゆたらぶ給ふゆどゆ
浄衣のぬぶてきぬゆうたとのいろのごとゝえけるゝと 運歩

喪衣、一口 中陰のとき 善ちう

いろ 音

年だとう哀ある事いあゝ〳〵 喪中ゆ籠りをる所をのふ 文實 一 皇太子
塵添壒嚢抄 十六 倚廬の御所とい諒闇の時天子の皇居也 下殿御宜陽殿東庭倚廬 徒然草 諒闇の
〳〵倚廬の御所のさゆうと

いろあるる

染色の成あう 東北院職人歌合 うとゝある
人の心の花あさだいゝ〳〵ほそめゝいろ

あうる
らむ

いろあらる

色をアゲル をいふ染ものをデカス あう
東北院職人歌合 月ちめぐよろの嵐のいろ

いろあげ 俗

古き布帛あどの色褪たるを再び
染て色を鮮ゆちるをいふ
色々あて さまぐゝらさぐ あどのふゆあめ
源 夕負 菊裁 のいろぐゝたるとたるをとちぎ

いろ〳〵

ぐとゆやきゝひ給へるきゆ 又 御法 いろのわどゆいとあゝいろ〳〵あ色ちうけ
けん 又 明石 いと物さとが〳〵 けきもぶ色々のゝとぐ〳〵さけさせ給ひて 又 橋姫

色々のかさねをきてゆきてゆかよひける御ふみの返事 枕七 戸口ハ人々の袖ぐちゝとさまとひきてあげたるハ

いろ〳〵おどし

筋の直衣ハ色々威の鎧着て、 鎧のいろ〳〵の絲まぜて綴〳〵たるをいふ 参考大平八 結城九郎左衛門尉親光ハ細以上百五十騎まて

いろ〳〵な 沈 汎 好色〳〵なる色をこのむこゝろの深きさまをいふなり 今昔九八 重方ハ本より

いろ〳〵な心ありけるものゝあるを妻もつ猶ハ妬さけるを 十訓八 いろみ

ぞ〳〵いろ〳〵〳〳〳〳いろふ〳〵こゝろを歌を人〳〵とつゝもゝこゝろのうちを

あ〳〵もせる

たゝひあり

いろがね

染たる革をいふ 東十三 御布施、導師分云云色革百枚

いろがひ

種々の貝をいふ 夫廿七 汐ゝゝゝ磯間ハなひ〳〵色貝のうきをまぐさ繰ゝたるうゝ

いろがひ 近江俗。べゐがひ

分名さゝゝ貝の一種ゝ〳〵と其一方ゝ〳〵尖り色深紅なるものゝ〳〵と大なるハ寸ハ

至る美麗の

分なり

いろがみ

染たる紙をいふ 夫十三 かりゞ猶のゝ汀つゝねたる玉づきハ浅ゝどりなる空のいろがみ

いろきちがひ 俗

色情ハ因て發狂〳〵たる人をいふ

いろくさ

色々種々なり 源野分 秋の花を植させ給へることゝ常の年よりも見所おゝくいろ

ゝきとつく

〳〵て

いろくの

鱗の下ハ

いろくの。うろぐ

注也

魚鱗より出て魚の総名となるもるあり

瀬ゝをあつよるもの

新六二 男山あきのけふとや誓ひけん川

いろくの

いろこ。ふけ

人の頭ハつ〳〵垢たり今いふ フケ のことあてそのさま鱗のごとときよりいふ

和 雲脂 和名伊呂古 頭垢也

いろこ。うろこ。こけ

。いろくの

鱗属の皮上ハある所の扁小なるものハ〳〵て或ハ堅硬或ハ軟薄なるあり 記上

如魚鱗所造之宮室字鱉伊呂己
和鱗以呂久以呂久諸俗魚甲也

いろこ 俗
魚鱗より出て魚の総名と
なまるなり

いろこ 俗
俳優及男色を賣る
ものをいふ

いろこがた。うろこがさ
衣服の模様などふつゝる魚鱗のうたを
いふ大平十八前代のもんゆ三いろこがたを
せゝれ〳〵がわろびと今の世二引両ふりぬこまをやるこわろがさん
まるもんゆ一引両ととそあゝむだゝめ

いろごのみ
いろこのむの體言好色の人をいふ伊あめ
の下のいろごのこ源のいたるといふひと
古今序いろごのこの家ゆうもまぎこの
人まるまぬこととゝなりて

いろこのむ マミムメ
男女の情をいろといふそまこをこのむまて
イロズキをいふ大和あるごろいよ紀人々市ゆ
いろたていろこのむこぎゝまけり
かゝりとまるゝうけさうゝけり又平仲いろこみこ
う

いろごろも
色うつくゝ紀服あり源葵あまた年けふ
あゝためゝ色衣きてゝ涙ぞふるこゝちもする

いろざ〳〵 俗
彩色ゆ同じ

いろさゞい 俗
螺類いろさだえゆ
あるゝ

いろさだえ 俗 ○いろさゞい ○ごゝきさゞえ
今名拳螺の一種つのなゝゝして小く
其大さ一寸許其色數様あり

いろざと 俗
遊女の居る
所をいふ

いろさま
色の様あり狭三さゞうあるぬ所あく
らうたげふうゝゝゝし御色さまをそて
いろぢりの
鳳凰桐あどの模様をいろどりて摺り
たる裳あり紫式部日記こうをのおりもの
衣

いろせ
兄弟を通じて呼称あり記上小説誕吾者
天照大御神之伊呂勢者也故今自天降坐也
品數の添ふをいふあり玉葉雑四都をまを
うるまて後もの申ける女のもとより前右近
中將維盛たうあくなりふける事を聞つたへてあつまてものとゞ
いろそふさまのふのひあこせて侍りけるふんりごとふ

いろそふ ハヒフヘ
侍りけるふんりごとふ

いろだま 俗

木名、ざくろの下ニ注セ

いろづく カキクケ

色の付くといふなり 万四 あさうけニ色付山の末〳〵ものもひたぐべき君ニあら〳〵

源志摘花 もゝぐゝのもとの紅梅のとゝきゝ花までいろづくまで咲たるを給ふ

又若菜 御たゝのいろづくまで咲たるを給ふ

いろつけやき 俗

醤油まて色つけ焼たる食物をいふ

いろつや

色と艶とをいふ 枕十二 朝日さすぐゝときゝあぐるわど云々御こゝのろたびゝのいろつやあどさへぞ

いろみどき

いろと

應神紀 則以其兄弟子孫爲膳夫而奉饗焉 仁德紀 今我也弟之妹まゝ弟をいふ 神代紀上 妹自左巡 釋紀十六 私記曰云々若正相對而言之則謂イロト

且文獻不足、何敢繼嗣位登天業乎

いろどり

體言

彩色をさすをいふ又顔ニ粧をさすをも

いろどる ラリルレレ

いふなり 万七 服色取摺目伴 古今秋上 いと

もゝ〳〵もゝ〳〵ぬる雁ニ白露のいろどる木々もみぢあへなゝ〳〵ニ

後撰秋上 あきはぎのいろどる風のふきぬるをたれかは人の心もうたがへる

又風さむこゝゝ松むゝのあきはぎのいろどるとゝ草葉のいろゝどる露とあゝらめ

源末摘花 繪あどうたといろどり給ふ 又總角 額髪をひきうけつゝいろどり

たる額づつりとよゝくゝして

うちふるまゝあり

いろなる クシキ

色のあるをいふ又好き色のところゝあり

無きゝゝごとゝをもいふ 後撰秋下 秋の野の

ゝきのごとゝもをるゝなる色あるきつゝゆいそめゝとあるゝふ 千載秋下

吹うたる柞ゝ原をこゝてゝせゝ色ゝをるゝ風もゝこぢゝふけり 拾玉七 さび

ゝはゝふゝるゝ心ゝふゝゝあゝけゝ色あゝき

野邊ゝ色いゝあゝける

いろなる クシキ

好色けのあゝきをいふなり 新古雜上 あゝ

月もやどる

ものゝ

ゝがゝいろゝるゝ人の袖をゝよゝたゝるゝふ

いろなゝぐき

松の異名 藏玉集 あゝ露もとゝたゝその名

けり、松を色無草と號けて秋の部ニ被入事ハ草木異名と被分後

なる色あゝきかりそめの間も秋ハ来ニ

鳥羽院御時、立田山時雨もあへぬいろあゝき風ゝゝ秋の音をきゝらん

依此歌被入なり

いろ彩　兄姉をいふ敬ひ親む語あり　神代紀下　亦吾姉磐長姫在　又吾父及兄何處在耶

いろ〳〵ゝ染たる綾をいふなり

いろのあや　内藏式　御服料色綾六匹　新羅文

いろのあんぞ　色うつくしき服をいふ　榮晩待星院の西のたいの南のゝうけと色の御そなり

いろのちぐさ　色のさまざまあるをいふなり　古今春下　春霞いろの千ぐさにうつろふたるべく

山の花のみかも

いろは　母ゝおもゝ　日本紀竟宴歌　賀曾伊呂婆　あそもてとそぬひしものとい三とせゝ

ありぬあ〳〵たくぞ〳〵と　實方集　いろえゆゑあやのうふこと

年をへてとらる人あるてどいとふものうい

いろは　童子ゝ書を學ぶ始る八句の歌あり其首の字を以て篇ゝ名とするなり　台記　久安六年正月十二日

今日今麻呂參御前依勅書以呂波かけてこゝたせば波のいろはのあ〳〵でありけり　壬二下　淡路〳〵ゝ難波を

いろはがるた　俗　いろは短歌を骨牌ゝ作りたるものなり

いろはさう　尾張　俗　草名紫參の下ゝ注ゝ

いろはたんろ　俗　いろはの一音を冠て譬諭の諺を列ねたる者なて實ハ短歌ゝあ〳〵ゝ諺なり

いろはぢたん　俗　だのきぢうん　賤種なて接換の砧ゝ用ゐる牡丹なり○平頭紫

いろはもみぢ　俗　葉七文ゝ生ずるゆゑゝのふもみぢの下併せみるべ〳〵○槭樹

いろふ　ハヒフヘ　物ゝ色をまして染やうるゝ〳〵ゝまる意なり

いろへる　ヲリルレ　いろひてあるを

いろふ

和泉式部集下　いろどりあるもひあ〳〵ゝとも　いろへるあるぞ〳〵この花　類名　艶イロ　字鏡集　艶イロ　そのこゝゝかゝりあひ口をいだゝをいふ

ふるゝともいろとあ〳〵いろひつゝ　綺　大平一　御治世の事ハ朝議ゝあまるべ　東六　可令停止地頭

又取あつゝふをもいふ　源松風　もつのまの

ゝふまつる人あるべ　家いろひ申べきゝゝ

あらざと勅答申て〔尺素往来〕國衙分所務任先規不可相続〔徒然草上〕世の
中にそのころ人のもてあつかひぐさにいひあへる事いろふべきにはあらぬ人の

いろふし
晴なる事をいふ〔守 藤原の君〕かくて此寺にハ
けふのいろふしにてけしからぬいとあはれ
かり〔蜻 上下〕儀式の車にてひきつゞけてふりあどかゝしいけがいろふしに
出たらむこゝちして今めかし〔源 澪標〕かく口をしききはのものだに物思ひ
あげきてつかうまつるをいろふしに思ひたるに〔枕五上〕ざふしきらうちん
ともいうらしきいろふしと思ひたるいとことなり〔徒然草上〕よろづの
物のきらかざりいろふしも
夜のみこそめでたけれ

いろふる
色そへてあやうるはしくきるをいふ〔六帖六〕ふる雨にしめぞめふらし花にけさ
こゝはいろへて咲そちにけり〔竹〕らさぎしのうるはしき瑠璃をいろへてつ
くりたり〔今鏡十〕こゝのちをいろへてたゝえたをとをり〔平家十二〕與一めせと
てめさきいけり與一其頃はいまだはたちばかりの男なりかちに赤
地のにしきを以ておほくびはたそでいろへたるひたゝれに〔遊仙窟〕
光彩イロヘタルサマ又彩色イロフ

いろへろ㊗
草名、さゞやさんの
下に注せ

いろゆるぐふ
色のあらりしやうにさめるをいふなり〔續後拾 春上〕鶯のなくねあるにふうめの
花のいろゆるぐんとや雪の
ふりそふらん

いろん㊂
人に異なる論をいふ
〔以字〕異論イロン

いろめ
其色々の名目をいふなど色といひなんず
ごとし〔續後拾 戀四〕雲鳥のなそのいろ
めらもあらもわれぬ人をあひ
みて程のへぬまじ

いろめ㊗
瞬まて人を見るをいふ色めかしき
眼の意なり

いろめかしき
好色ズキラシイといふ意又ナサケノアリサウナサマ
とものふなり〔榮 月宴〕かの北の方の御かた
わかき心もさうしう今めかしうあらうしけるいろめかしうさくへおちうけれバ
かゝることいあるまじきなるべし〔源 紅葉賀〕いろめかしうなよび給へるを女にて
見むかとうしかりぬべく〔又 葵〕いろめかしき
こゝちに打守らむろ

いろめく
其ものゝ色のあらはれて時節めくをいふ
なり〔續後撰 雑上〕まどろまで孫をのこぞあく

萩の花いろめく秋の過すものを

いろめく カキクケ

好色ズキニ見エル 又 情ナホゲニ見エル ものふあり

隆信集 いろあらむ秋近くある女郎花軒端の水やかゝるゝあるらん 重之集 らちあす〜や君ゞそのゆいあげるゝん色めく あるふめゝへせゞ〜とや 金葉秋 白露や心あゝゝん女郎花いろめゝのべゝ 人かよゝふゝゝ

いろめく カキクケ

あひろるさゝのゝあるゝとゝふあり 太平ハ ゝゝや敵ハいろめたるゝゝこゝゝゝと

たゝき 類名 楓メイロ

いろゝも

妹ハあるゞ 記上 其伊呂妹高比賣命 思顯其御名故歌曰

いろゆるゝる レルレルレ

深紫絃等の衣服きるゝゆるゝるゝゝとゝふ 女房ハ綾あり物きるゝとゝいろゆるゝるゝゝと

いろふあり 大和 いろゆるゝれ給ひけり云云院の御せうそこのゝゝと嬉〜〜 侍りてかゝいろゆるゝれ侍る事あゝゝきこゝゝ給ふ 伊 昔あゝやけあゝ〜 てつゝう給ふ女の色ゆる さゝゝたるあうけり

いろよゝた カキクケ

色のよろ〜〜きものふあり 七十一番職人歌合 戀ゝゝてあゝゝゝたるひゝちゞ孫いろ

いろよゝ

いろよ〜〜と人ハ ゝゝゝゝ

いろう

金箔の名、上呂のものゝゝ

七十番職人歌合 歌上ハ出だゝ

堅魚のいろうの下併せ見べ〜 厨事類記

四種器酢酒塩醤或ハ止醤用色利イロウ

いろゝ 俗

刀劔の具あゞゝ金銀を鏤たるゝゝゝ

いろゝ

彩色画を

いゝ

こゝゝよりゆゝゝゝたゝゝゝとゝふ後世以前の意ハ用ゆるゝ誤あり〇以往

いゝとう 音

石名、硫黄の下ハ注ゝ

いゝとう 俗 ○つけぎ ○ゆゝとうぎ

つけぎの一名ゆゝとうの下ハ注ゝ〇引光奴

いとうさう 俗 ○やまたさう ○らされぐさ

草名、一根より叢生して高二三尺葉柳に似て二葉或い三四葉對生して莖頭に疎
ある穂狀をなし五瓣の小黄花をひらく

いとうる ゲウ 名

たとうるより出てつよくぬ心に驚くとのふ 安開紀 春日皇后不知直入驚駭

而顛慚愧 無已

いとうる ゲウ 名

人のいまだ成長せざるをいふ
聞あるいなどさふらふ人々も聞えあへり 又夕霧 猶のとのりけてつよき御心ばせをのふなり 源 紅葉賀 心あげにのりけて
心ばせのあるうけける事と 又螢 おさのりけたる心ばえなどのけて
ひの見あるぶ 又繪合 めあるのりけたる御ふるまひ
あらぶるとて 栄花 藤つぼ いとけたる事なく

いとけなし ゲウ シ キ

人のいまだ成長せざるをいふ
わかくさなどとのふなり
いとけあらとあるを
いふなり

いとけあるる ゲウ ル レ レ

六帖三 あふことのかたよりせにまさる戀かふりぬる
源 桐壺 いとけあらぬ時より見奉り 又夕貞 いとけあらぬ

やとは思ふべき人々のうちにて給ひけるあどうそらむ人
あまるまあるうあしろど 家長日記 はらそ親もいとけあらぬ
世をちふうしとそなるあたあろき
らろきもそなろ稚び

いとこ ○おやいとこ ○むかいとこ ○さはいとこ ○やはいとこ

魚名形あぢに似て小く圓く細鱗有
うて落やはく背蒼黑ふて腹銀白色光あり 脂多く大なるハ九寸に至る者あり 主計式上 漬塩雜魚乾鰯各卅六斤 字 鰯 加

和漢語抄云鰯以和之今按本文未詳 ○鰛魚

伊豫の産黑色に漬たる鰛なり

いとのらづけ 俗

鰛魚を煎たる汁をのふ
齋宮式 鰯魚汁一斗五升

いとのまる

鰛を煮て羮にして酢を加へたる者をのふ
新猿樂記 所好何事云々鯖粉切鰯酢煮

いとのまり

さうひ異なる國をのふ異國
外國にあらず ○異域

いとき 音

公事儀式の時公卿以下庭上に立列をのふ
詞なり 内裡式 元正會式親王以下參議

いとぎうぎう 音

非參議三位以上一列、云云異位重行 儀式四 異位重行、立定 代始和抄 二位一列、三位一列、四位一列是を異位と云三位等ゝをゝをゝをゝをゝをゝを重行と

いをゝ 雲圖抄下 次勝方拜退 勝方王卿侍臣相撲立射場東庭異位重行再出

いを

魚の総名ゝをの下ゝ注也 神代紀上 海神乃集大小之魚逼問之 和 魚和名宇乎俗云伊遠

鄉の一種身圓くゝて鯉の如きものをいふ

いをとう。さとうを

魚類を商ふ人あり 七十番職人歌合 いをとうりかうらあをとうとうるゝとやこゝは

たが月の價ぞあゝぬくゝ

いをとぐゝ 俗 うをとぐ

魚を刻る串あり竹まゝゝ銅鐵まて造る

いをとさを。やまぶきさう。たうごぼう草名、春舊根より生也圓莖直立高さ四五尺、葉の形烟草ゝ似て小く滑あり互生也夏月枝梢ゝゝゝゝ小枝を出し、穂をなす〳〵と五瓣の小花をひら〳〵、白色まゝて中ゝ緑實あり後綠色ゝ變也 本和商陸和名以須岐

いをぬる 和 又知又知 即て寢るをいふあり 万十三 白妙のこひしきの細江の菅鳥の妹ゝこゝろまやゝ寢宿ゝ移つる

古今戀五 夢ゝだにあふことをたゝくあり田くゝ引まやりを移ぬ人やゝもきる 和泉式部集 浪間よりいきり をぶ移のこゝろをつるいりを移くゝ移が見ゆるたゝり けり

いをのかゝらのゝ孫 魚類頭中ゝ在る石をいふ

○魚鮫 和 魚丁和名以乎乃賀之良乃保祢

いをのふえ。うきぶくろ 魚類腹中ゝ在る楕圓ゝて水泡の如く透明なる薄皮を云○魚鰾 和 脬漢語抄伊乎能布江

魚腹中脬也

いをめ 俗

手足ゝ生ずる病まて其狀魚の眼ゝ似たり

いをめ

いをほの下ゝ注也

語彙巻十

木村正辭 總裁
中議生 横山由清

岡本保孝
榊原芳野
黒河真頼 共撰
塙忠韶

物産諸品校正
伊藤清民
田中芳男

定價金九十四錢